ハンドボール「第38号目次」

昭和41年11月号

〔表紙写真〕　日中親善ハンドボール最終戦から（駒沢屋内球技場）

私のことば

青年に"活"を入れよ

京都府協会会長
木下弥三郎



9月25日、「台風26号が静岡にそれた」とのテレビ情報に、雨の京都市では市立体育館に中国チームを迎え、京都学生選抜チームとの国際競技を開いた。すでに芝浦工大をはじめ各地の連戦を経て、優秀な成績をあげている中国チームだ。京都ではあまり見苦しい勝負をしてくれないようにと心に祈った。スタートと同時にまず京都学生が1点を先取した。観戦者も珍しく多い。接戦の結果、前半は10－15で終えたが、後半には選手交代のためかサッパリ成績があがらず、ついに36－14とみじめな勝負に終わった。

中国選手の体格のりっぱであり、競技も一段とすぐれていた。翌26日一行を京都市内観光に案内し、夜はレセプションを開いた。日中の親善を一層に深めるために……。互いにあいさつをかわし、なごやかにビールを傾けた。そして歌の交歓をとの発言が出たので、私は会長として日本の古典音楽「謡曲竹生島」の一曲を披露した。続いて日本側の学生一団となって祇園小唄を合唱した。中国は「蒋介石を打つ」歌を元気に合唱した。次に日本側が「ソーラン節」を、中国は「台湾に中国の旗を立てよう」を合唱した。最後に選手一行の健康を祈って散会した。試合からレセプションまですべてが一貫した激しいファッショ調である。過ぎし大平洋戦時中の特攻隊を送り出した日本の軍国主義となんら変わらない。この激しいエネルギーが恐しいまでに受けとられる。これに反し、日本の青年ののんびりした行動は、あまりにも極端に感じられる。そのうえ彼らは毛主席の教えとして「まず体を鍛えよ。そして努力そして勉強」と最後に「職業の実務」とを三原則とする教訓を実行に移している。私は大正4年、第一次世界大戦に青島戦跡を訪れていらい昭和20年の終戦まで約30年間大連、天津、北京と日本内地とを往復してきた。また現地の経営に数百人の中国人を使ってきた経験をかえりみて、その当時には、中国人青年に今日のような気迫は見られなかった。この性格の変わりように驚かされたしだいである。

このままでは将来ハンドボールだけでなく、各種スポーツは中国に負けるのが必然であると残念ながら思った。これにたいし、日本ではわずかばかりの「しごき」に体育クラブ関係者に非難の世評がわく。彼我を対照して日本の将来を憂うる必要はないものかと思い、あえてここに提案する。あまりにもかい性なしの日本青年に活を入れることをスポーツの指導者の方々に要望致します。

日・中国際親善ハンドボール

中国８勝１敗の成績

全日本、惜しくも敗れる

中国男子ハンドボールチームは９月15日来日、17日横浜での第１戦芝浦工大との試合を皮切りに、名古屋、静岡、大阪、神戸、京都北九州、下松、東京の各地で計９試合を行なった。中国チームは圧倒的な強ちをみせ、第１戦の芝浦工大に敗れたほかは８連勝し、通算８勝１敗で全日程を終了した。中国チームは10月５日正午羽田発のＢＯＡＣ機で帰国した。〔カット写真は最終戦〕

芝浦工大逆転勝ち

近藤の好技、勝利を呼ぶ

目立つ中国のポストプレー

第１戦

◇第１戦（９月17日・横浜文化体育館）

▽レフェリー　岡村昭二（教大出）

芝浦工大　23（16－７　７－14）21　中国

	芝工大	得	中国	得
GK	山村	0	陳維政	0
GK	伊藤	0	曹俊鴒	0
FP	近藤	11	朱炳亢	2
FP	岩崎	3	楊霊藩	6
FP	関根	1	胡亦成	0
FP	山田	2	関香閣	0
FP	近森	3	徐国其	0
FP	竹内	3	王洪橋	2
FP	小林	0	劉延江	8
FP	桧森	0	李智連	0
FP	白神	0	鄧福宝	1
FP	明石	0	荆元崙	0
FP	高鍬	0	卜憲章	2
7MT		23（２）		21（４）

長身者ぞろい

〔評〕中国選手の紹介があったとき、からだががっしりしているの見て驚いた。隣にいた朝日新聞の渡辺（邦）記者も「すばらしい」とほめあげるほど。アメリカン・フットボールの選手が用具をつけているように肩幅が広く、日焼けした真っ黒な顔。平均身長180・２センチの長身者ぞろい。昨年中国遠征した高島理事長、岡村常務理事が口をそろえて「中国チームはたくましい。将来恐るべきチームになる。アジアにこのような強力なチームがいることは、日本にとって好つごうである」と言っていたことを思い出した。しかし試合前の練習を見て、ちょっとがっかりした。バスケットボールの出身者。私が期待したような鋭くて早い動きというものがなかった。バスケット式のドリブル、パスで果たして日本のハンドボール専門のチームに通じるかどうかと思った。

中国、正確なパス

芝浦のスローオフで開始。いきなり近森が中国ゴールに殺到、中国の激しいアタックでもみ合う。ルースプレーだ。ボールをキープした近森は中央にいた山田にパス、山田すかさずシュートして先制の１点。この間わずか15秒。日本のすべり出しはよかった。今度は中国ボール。中国のプレーはバスケット方式。話には聞いていたが、スピードがない。セットオフェンスである。パスを見ても両手である。パスそのものにスピード

がない。手はグローブのように大きいので、ボールが小さく見える。パスは実に正確である。ミスがほとんどない。ゴール前でのミスは相手の逆襲を招く。これは日本チームも大いに見習うべきである。

中国は4分速攻で鄧がゲットし1―1。中国は実にからだが柔かい。うそのようだ。あの大きなからだでありながらフェイントがうまい。ディフェンスが一歩前に出てシューターを詰める。中国の選手は、相手の詰めにたいしてくるりと背を向け、次の瞬間、ワンフェイントをかけて左へ回りシュートする。このプレーはよかった。また中央突破を試みる。ちょっと強引のように思われるが、このくらいのプレーは当然であろう。さらに目をひいたのはポストプレーである。前半中国があげた14点のうちポストプレーによる得点は6点もある。(楊が4点、劉が2点)。にあざやか。あれよ、あれよ、とそれが実いって間に中国の得点がふえていくばかり。

月日	開催地	成	績
9.17	横　浜	○芝浦工大 23(7―14 / 16―7)21	中　国●
18	名古屋	●全 愛 知 14(5―12 / 9―12)24	中　国○
20	静　岡	●全 静 岡 10(5―13 / 5―14)27	中　国○
22	大　阪	●全 大 阪 13(8―9 / 5―5)14	中　国○
24	神　戸	●全 兵 庫 16(11―12 / 5―19)31	中　国○
25	京　都	●京都学生 14(10―15 / 4―20)35	中　国○
29	北九州	●全 福 岡 13(6―13 / 7―18)31	中　国○
10. 1	下　松	●全 山 口 11(7―12 / 4―12)24	中　国○
3	東　京	●全 日 本 17(10―10 / 7―8)18	中　国○

呼吸合わぬ芝浦工大

中国は5分劉が7MTして2―1。6分楊が見事なワンフェイントをかけて芝浦バックスを抜いてゲット。得点は4―1。芝浦はインカレ、全日本総合でみせたあのスピードがない。選手たちは試験のため、まとまった練習ができないのでコンビが合わない。芝浦は8分、ルースプレーからボールがサイドラインを割った。中国のボールか、日本のボールかわからない。レフェリーのジャッジで日本ボール。ことばが通じないのか、中国は一瞬ぼーっとした。それを見た岩崎は右サイドから流した。これがゴールインして4―2、9分には速攻を展開、山村のうまいボール出し、山田が一気に持ち込んで4―3と1点差にした。

一線防御の中国

中国は相変わらずセットオフェンス。しきりにポストプレーをねらい、中央突破を試みる。芝浦は激しくアタックする。中国は11分トの好パスを王がゲット、12分劉のポストプレー、13分楊のポストプレー、13分30秒朱のノーマークシュート、15分劉の7MT、16分劉のポストプレーと一方的に攻めまくる。スコアは10―3と大きく差がついた。中国はさかんにダブルポストで芝浦のディフェンスを脅かす。芝浦の動きは悪い。芝浦が攻めると、中国は終始一線防御を敷く。長身者ぞろいで一線防御だと、ゴールが全く見えない。中国ディフェンスをゆさぶろうとしても効果がない。芝浦は17分近藤が中央からアンダーシュートして10―4とした。中国はしきりにダブルポストで攻める。19分楊のポストプレー、20分劉の7MTで12―4と8点差。

芝浦は少しもよくない。走りがない。スピードがない。パスミスが多い。スタンディングシュートする。やはり練習不足なのだろう。三千の観衆はヤキモキする。中国は余裕をもってプレーを続ける。21分芝浦は近森が好パスを送り、近藤があざやかなポストプレーで決めた。12―5である。このあと21分から26分まで膠着状態となった。芝浦が攻める。パスミスをする。中国は26分速攻をみせ、朱が決めて13―5。今度は芝浦が28分に近藤の右45度からワンバウンド・シュートで13―6、29分またも近藤が右45度からワンバウンド・シュートして13―7。中国は29分30秒に楊がポストプレーを決め、前半14―7で終わる。

芝浦工大猛反撃

ハーフタイムのとき、的場常務理事が私に「中国は予想どおり強い。なかなかやるね」と言った。私は「そうはいかないですよ。後半きっとひっくり返しますよ。中国はそれほどでもないよ。後半が楽しみです」と返事した。いよいよ後半が始まった。30秒に中国のトが中央を強引に破り、4分に速攻から楊がゲットして16―7と9点がついた。〝勝負あった〟かにみえた。しかし芝浦は前半とは打って変わり、コートいっぱいに走り回った。竹内を右サイドに置き、激しく中国ディフェンスをゆさぶる。芝浦の動きが目まぐるしくなる。中国は芝浦の動きについていけない。チャンスだ。5分、7分に竹内が右サイドぎりぎりからシュートして得点した。芝浦は徐々にではあるが、調子を出してきた。得点は16―9。

近藤が連続6点

芝浦は9分岩崎のポストプレーを皮切りに反撃に出た。10分近藤が中央からジャンプシュート、10分30秒またも近藤が中央からジャンプシュート。芝浦は近藤にボールを集めて打たせた。近森のブレーキが気になる。12分近藤が三度び中央からジャンプシュート、14分には近藤が7MT、15分に近藤がワンバウンド・シュートして17―15と一気に差を詰めた。体育館は騒然となってきた。芝浦のシュートのたびに大歓声。17分近藤が左45度から決めて18―16といぜん2点差。近藤は連続6点をあげて芝浦反撃のチャンスをつくった。

これからが勝負どころ。私は「芝浦の1分1点作戦」に期待した。中国は浮き足立って再び陳維政がゴールを守る。18分久しぶりに近森が中央からジャンプシュートして18―17と1点差に詰めた。中国は20分ノーマークから劉が決めて19―17。芝浦は21分近森の好パスから岩崎のポストプレーで19―18、試合は1点を追って激しさを増す。体育館は一球ごとにわき返る。24分30秒に近藤が7MTを決めて19―19とタイスコア。試合はますますおもしろくなってきた。前半と変わって中国の動きが悪くなった。攻撃が単調になって

きた。ダブルポストを試みたが、もうこの手は芝浦に通じない。正面からの攻撃だけだ。変化ある攻撃というものがない。残り時間はわずか5分となった。

近森とどめの決勝点

芝浦は思い切り走った。そして打った。芝浦のベンチは静かなものだ。勝てるという自信があったのだろう。25分15秒関根のポストプレーで20—19と芝浦がリードした。芝浦は前半開始直後に山田のゲットで1—0としていらいのリードである。関根にとっては初の1点。芝浦は攻撃の手をゆるめず、26分竹内が中央からジャンプシュートして21—19と初めて2点のリードを奪った。中国も必死になる。27分王が左サイドからジャンプシュートし、次いで劉が7MTして21—21と追いついた。残り時間は3分を割った。攻める芝浦、守る中国、大歓声を送る三千の観衆—久しぶりにハンドボールのだいご味を味わった。後半は芝浦のペース。伝統の1分1点作戦だ。28分近藤が正確なパスを近森に送る。ポストにいた近森がふり向きざまこれを決めて22—21。観衆は飛び上がって喜んだ。29分今度は中国ボールを奪って速攻。山田が走る。近森が走る。中国の楊が追い駆ける。山田のパスを近森が受けてジャンプシュート。白いボールは真っ白なネットに突き刺さる。23—21。芝浦の2点リード。残り時間はほとんどない。やがて岡村レフェリーのホイッスルが鳴った。

芝浦が中国のナショナルチームを破った。中国は世界でも上位にランクされていいほどの実力がある。昨年日本チームが中国に遠征して1勝8敗の不成績に終った。しかもこのチームにも完敗した。いまこの中国ナショナルチームを芝浦が破った。前半14—7と大きく差をつけられながら、後半ものすごいファイトで中国を押えつけた。芝浦伝統の強さである。それにしても近藤が後半にみせた連続6得点は、芝浦の敗勢を救い、反撃の糸口になったのはすばらしかった。さすがはキャップテンである。実兄の近藤金博君（東京重機監督）も大喜び。この試合で近森がブレーキになっていたが、21—21から連続2点をあげて決勝点としたのはほめていい。大方の予想が〝中国有利〟といっていただけに、この勝利は永久に忘れらないだろう。三浦ハンドボール部長（芝浦工大教授）も中沢監督も、芝浦の粘りに満足した表情だった。

☆ ☆

中国、じわじわ加点
全愛知を文句なく降す

第2戦

◇第2戦（18日・愛知県体育館）

中国 24（12—9 12—5）14 全愛知

▽レフェリー 稲石三二（日体大出）

得	【全愛知】		
0	牧（中京大）	GK	
0	近藤（桜丘会）	GK	
1	新（愛知紡）	FP	
1	川島（東海電気）	FP	
1	林（桜丘会）	FP	
6	高橋（桜丘会）	FP	
1	安藤（中京ク）	FP	
4	有本（自営）	FP	
0	小川（桜丘会）	FP	
0	山田（桜丘会）	FP	
0	餅原（日本碍子）	FP	
0	森田（中央電気）	FP	
14	（2）		

得	〔中国〕	
0	陳維政	GK
0	曹俊鴿	GK
8	卜憲章	FP
8	楊霊藩	FP
1	関香閣	FP
2	王洪橋	FP
2	朱炳亢	FP
1	李智連	FP
1	鄧福宝	FP
1	胡亦成	FP
0	徐国其	FP
24	（2）7MT	

▽交代 中＝劉延江、荆元崙▽愛＝高見（中京大）北川（中京大）堀（安城高教員）小鳥居（稲沢高教員）西尾（自営）以下FP、得0

当日朝、横浜から乗り込んだ連戦の中国は疲れからか立ち上がり精彩がなく、全愛知はそこをうまくついて4—2とリードした。しかし中国は、すぐにペースを取り戻し左腕卜憲章と楊霊藩のコンビの連続得点し、13分には7—4と逆にリードし、前半終了間ぎわにも連続5ゲットして全愛知を引き離した。

体格でハンディのある全愛知は、まともに走り合って勝てる相手ではない。序盤のテンポのおそい試合展開を続けて中国をそのペースにはめれば、球趣を盛り上げることもできたろうが、混成チームの弱点をさらけ出し、凡失が続いて相手に立ち直るスキを与えたのはまずかった。

後半開始後、全愛知は2点あげて7—12、15分には10—14と反撃の気勢をみせたが、そのあと中国は16分、卜憲章のあざやかなジャンプシュートを口火にすばらしい速攻から連続8点をもぎ取り、勝負を決めてしまった。

中国はバスケットボール出身者が多いせいか、ハンドリングの手堅さは見習うべきものがあり、〝勝負どころ〟とみると、一気にスパートする精力的な攻撃策も目についた。全愛知は今春高校を卒業したばかりの高橋（桜台高）有本（名城大付高）が多彩な攻撃をみせたのに反し、ベテラン選手にかつてのさえがなく「ハンドボール王国愛知」にも新旧交代の時が来ていることを示した。（原田）

全静岡がんばる
大石（清商ク）が5点

第3戦

◇第3戦（20日、静岡市草薙体育館）

「レフェリー」渋谷行康（日体大出）

中国 27（14—5 13—5）10 全静岡

〔評〕平均身長で10センチ、平均体重で10キロ以上の体力的差のある中国にたいし、全静岡は初めの10分間善戦するのがやっとで、中国の一方的な試合となってしまった。その原因の一つに全静岡の

得	全静岡	
0	渡辺（清商ク）	GK
0	吉田（教員団）	GK
0	坪内（富士ク）	FP
0	塩崎（教員団）	FP
1	久保田（教員団）	FP
1	橋本（橋ク）	FP
0	山本（橋ク）	FP
0	高久保（橋ク）	FP
0	中村（香陵ク）	FP
1	榊原（清商ク）	FP
2	石川（清商ク）	FP
5	大石（清商ク）	FP
0	望月（富士ク）	FP
10	（1）	

得	中国	
0	陳維政	GK
0	曹俊鴿	GK
0	朱炳亢	FP
5	楊霊藩	FP
3	胡亦成	FP
0	関香閣	FP
2	徐国其	FP
4	王洪橋	FP
6	劉廷江	FP
0	李智連	FP
1	鄧福宝	FP
6	荆元崙	FP
0	卜憲章	FP
27	（3）7MT	

〔交代選手〕日本＝藤井（清商ク）宮城島（清商ク）得0

スターティングメンバーと交代選手との差があまりにもありすぎた感じがする。

後半開始直後、全静岡は早い攻めで中国のディフェンスをゆさぶり、橋原、大石（2点）がゲットして場内をわかせた。このチャンスに主力選手を交代させた全静岡ベンチの作戦はうなずけない。中国は劉延江、楊霊藩、王洪橋のダイナミックなプレーは印象的だった。全静岡は善戦したといっていい。

全大阪、1点差で敗る

ベテラン井が8点

第4戦

◇第4戦（22日、大阪府立体育会館）▽レフェリー 岡本克彰（日体大出）

中国 14（9－8 5－5）13 全大阪

〔評〕全大阪はポイントゲッター青木がマークされたので、ボールを井上に集めて打たせた。井上は期待にこたえ8点をあげる活躍をみせた。全大阪は東を中心にして一歩もひけをとらず、コンビネーションもよく着々加点した。後半開始後、少し中だるみがあった。このすきをねらわれて中国に得点された。中国は確実なパスワーク、強引なシュート力にものをいわせ、全大阪のディフェンスを破った。全大阪では井上、GK島崎の活躍が目立った。

後半27分、全大阪は青木のゲットで13－13とタイにしたが。この直後に劉延江にシュートされて万事休した。試合は1点を争う好ゲームとなっただけに。全大阪は惜しい試合といっていい。

得	全大阪			中国	得
0	光崎	（日体大出）	GK	陳維政	0
0	島崎	（〃）	GK	曹俊鴿	0
0	望月	（〃）	FP	朱炳亢	0
0	山本	（〃）	FP	楊霊藩	2
0	丸岡	（〃）	FP	胡亦成	0
1	東	（〃）	FP	関香閣	0
0	藤井	（〃）	FP	徐国其	0
8	井上	（〃）	FP	王洪橋	1
2	青木	（〃）	FP	劉延江	6
1	北岡	（〃）	FP	鄧福宝	3
0	加藤	（〃）	FP	卜憲章	2
1	松尾	（〃）	FP	李智連	0
0	田中	（〃）	FP	荊元崙	0
13	（3）		7MT	（4）	14

〔交代選手〕山崎、奥浜（日体大出）



中国チームを見て

小西博喜

体力の差と基本プレーの差がはっきり出ました。中国は平均身長180センチ、体重78キロという大型選手ぞろい。前、後半変わらないスタミナで走りまくる持久力。せり合ったときにびくともしない体力。日本選手とは根本的に違います。基本プレーの点では全くといっていいほどミスがなかった。パスワークが確実だし、ハンドリングにもスピードがある。旅の疲れがあるはずなのですが、ほとんど感じさせませんでした。これらがあの速攻となって発揮されるのです。あの出足のよさはすばらしいの一語ですね。

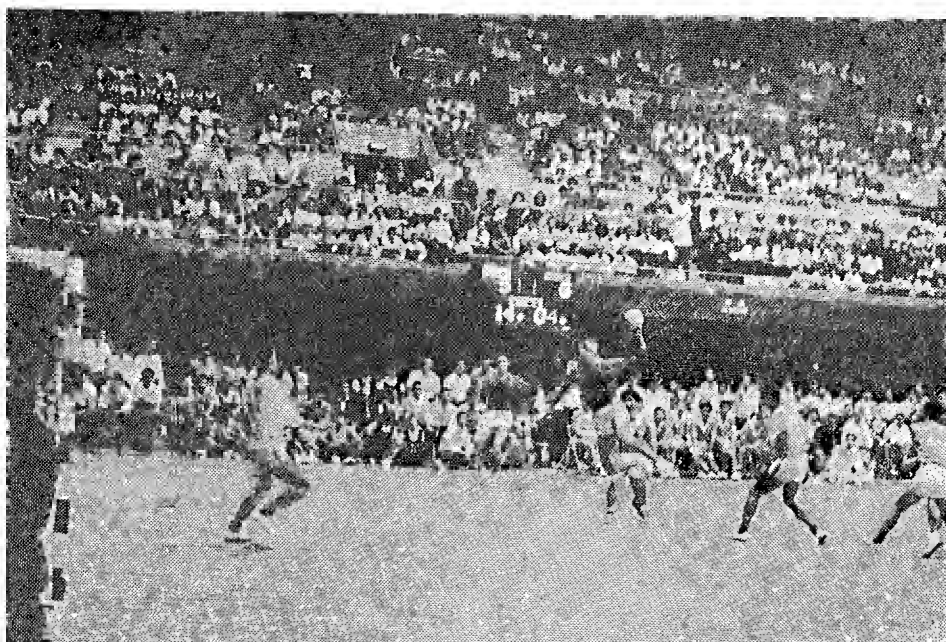
それと、気がついたのは攻守の切り替えの速さです。マイボールのときは一気に攻撃を仕掛けてくる。ほとんどシュートチャンスをのがさない。京都チームが再三失敗していたのとくらべれば、その正確さは歴然たるものです。全体の動きをよく見きわめ、連係プレーが的確だからです。そして防御に回ったときの戻りの速さも見事なものです。

中国は昭和三十九年に7人制に切り替えたばかり。その進歩の速さは驚異的といってよいでしょう。自分たちで戦法を編み出したのだといっています。このチームの選手は、全部、元バスケット選手ということです。中華全国体育総会（協会）というのがあってハンドボールに転向させたそうです。今では卓球、バスケット、サッカーに次いで普及しているそうですが、全くうらやましいほどです。

中国チームの課題としては、サイド攻撃の不足、ロングシューターの養成、アンダーシュートのマスターなどが考えられます。これらを修得すればまさに敵なしの強さになるのではないでしょうか。

（京都新聞から）

★　★　★


〔写真〕 中国対全兵庫戦

全兵庫善戦す

北山、福本好プレー

第5戦

◇第5戦（24日、神戸市中央体育館）

「レフェリー」 増岡茂美（東大出）

中　国 31（19―11 / 12―5）16 全兵庫

〔評〕前半全兵庫は死力を尽くして善戦したが、後半中国の体力に押され、速攻にかき回された。全兵庫も幸田の好配球で北山を生かし、前半福本、北山の好ゲットでがんばった。ディフェンス面でも元気いっぱいだったが、やはり体力差はどうしようもなかった。

得	中国		全兵庫	得
0	陳維政	GK	新　井（関学職員）	0
0	曹俊鴿	GK	市野瀬（富士レジン）	0
1	卜憲章	FP	福　本（　〃　）	3
5	楊霊藩	FP	北　山（滝川高教）	7
4	関香閣	FP	梅　田（小野工高教）	0
2	王洪橋	FP	栗　山（明石高教）	2
2	徐国其	FP	幸　田（滝川高教）	1
1	朱炳亢	FP	小　森（富士レジン）	1
9	劉延江	FP	森　末（阪東調帯）	1
1	李智速	FP	横　野（富士レジン）	0
0	鄧福宝	FP	泉（武庫工高教）	0
2	荆元嵛	FP	上　野（兵庫工高教）	1
4	胡亦成	FP	西　本（川崎車輌）	0
31	（ ）	7MT	（ ）	16

〔交代選手〕 両兵庫＝守屋（川崎車輌）藪田（ダスキン）

京都学生、反撃息切れ

中国、後半に地力発揮

第6戦

◇第6戦（25日、京都市体育館）

「レフェリー」 小西博喜（京都教育大出）

中　国 35（20―10 / 15―4）14 京都学生選抜

〔評〕 スケールが違う。京都チームにくらべて5センチ以上も大きい中国チームのたくましさに、まず驚かされたが、実際のプレーにもさらに格段の差があった。

開始早々、京都は鳥居が中央からミドルを放って好スタートをきったのもつかの間。すぐに中国は王が同点にしてからたて続けに4本決めて、アッという間に4点の差をつけた。サイドからの攻撃は全くないけれども、スピーディーなパスワークで一気に中央から仕掛けてくる。京都チームのディフェンスにたいし、ジャンピングスローで難なく突破するのだからどうしようもないところだ。

京都はこの前半を5点差に食い止めることはできたが、あまりにもミスが多すぎた。高い防御をしく中国にたいして、さかんにロングを放っては、逆に中国の速攻につけ込まれる。しかも連合チームのためにコンビネーションの悪さが出た。だから鳥居が単独シュートを再三試みたのは仕方がない。

しかし上から攻めるより、もっと下から攻めるのが効果的ではなかったろうか。さらに京都にとって誤算だったのは、長身飯田が全く封じられてしまったこと。しつようなマークと堅いブロックにはばまれて全くのお手上げ。同大のエースである飯田が、前、後半を通じて7メールスロー1本の1点しか得点できないようでは勝ち目はない。

後半は中国が調子の波に乗ったため、みるみる点差は開いてしまった。中国の完勝。（京都新聞から）

得	中国		京都	得
0	陳維政	GK	林谷（同大）	0
2	朱炳亢	FP	林（同大）	2
6	楊霊藩	FP	佐藤（同大）	0
7	胡亦成	FP	飯田（同大）	0
2	関香閣	FP	鳥居（同大出）	5
1	徐国其	FP	守本（同大）	1
2	王洪橋	FP	竹口（京大）	0
3	劉延江	FP	安達（京大）	0
5	李智運	FP	北田（立命大出）	1
1	鄧福宝	FP	市橋（京大）	2
2	荆元嵛	FP	重村（教大）	0
1	卜憲章	FP	木村（立命大）	0
32	（3）	7MT	（3）	11

〔交代選手〕 辻野（京大）田中（立命大）曹俊鴿（中国）

☆　☆　☆　☆

品質と技術を誇る

金型設計製作　　プラスチック成型　　部品組立

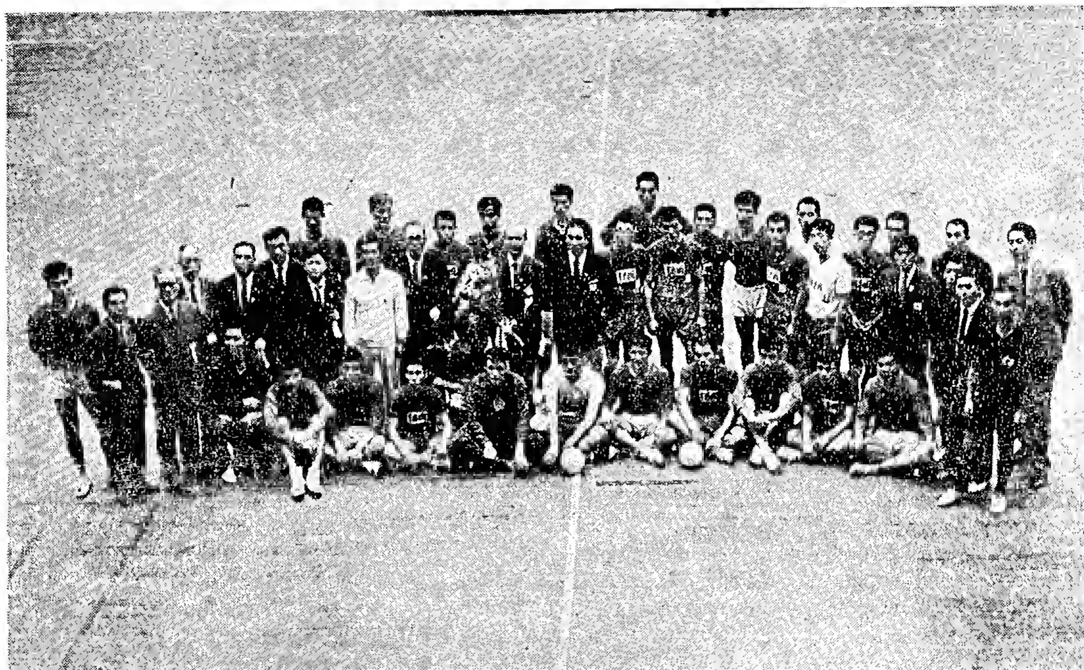
KONEKATA



株式会社宗形製作所

本社工場　大阪府高槻市辻子241番地
TEL. 高槻 (5) 5551 (大代表) 夜間休日5750～2

関東営業所　横浜市西区久保町49番地
TEL. 横浜 (23) 4964・9119番



↑中国、全福岡両チームの記念撮影

全福岡敗れる

白根、友広が各4点

第7戦

◇第7戦（29日・北九州市八幡製鉄体育館）

中　国 31（18—7／13—6）13 全 福 岡

「レフェリー」岡井幸由（日体大出）

〔評〕中国は地力を出して全福岡を寄せっけなかった。立ち上がりこそ全福岡がサイド攻撃して2点を取ったが、中国は劉延江が中央からたて続けにシュートして2—2と同点。このあとは中国のペースとなり、正確なパスワークと速攻で加点した。全福岡はディフェンスを固めて対抗したが、中国の力を押えつけるわけにはいかなかった。後半になっても中国は連続7点をあげるなど、試合を一方的なものにした。(日野)。

得	全福岡			中国	得
0	福　田	（香椎工高教）	GK	陳維政	0
0	酒　井	（岡野バルブ）	GK	曹俊鴿	0
4	白　根	（博多港開発）	FP	朱炳亢	0
2	三　友	（田川工高教）	FP	楊霊藩	1
1	小　林	（博多工高教）	FP	胡亦成	2
4	友　広	（岡野バルブ）	FP	関香閤	5
0	矢　島	（〃）	FP	徐国其	3
1	広　末	（田川農高教）	FP	王洪橋	4
0	清　川	（門司高教）	FP	劉延江	6
0	古　野	（筑紫女高教）	FP	李智連	0
0	山　田	（立花女高教）	FP	鄧福宝	3
1	中牟田	（福岡高教）	FP	荆元崙	4
0	伊　藤	（筑紫女高教）	FP	卜憲章	3
13	（2）		7MT	（2）	31

☆

☆

全山口が善戦

寂しい劉の欠場

第8戦

◇第8戦（10月1日、山口県下松市民体育館）

中　国 24（12—4／12—7）11 全 山 口

「レフェリー」柳井文治（日体大出）

〔評〕全山口のスローオフで開始。中国は一線防御と5—1ディフェンスをうまく使い、全山口の動きが止まると楊霊藩を中心とした1—2—3ディフェンスにスウイッチして速攻体制を整えた。そした楊霊藩にボール集め、卜憲章とのうまいコンビネーションで着々と得点をあげた。中国はじみで、着実なプレーに徹していた。

得	全山口			全中国	得
0	山　本	（東洋曹達）	GK	陳維政	0
0	野　村	（スーパー）	GK	曹俊鴿	0
1	浜　岡	（防長交通）	FP	朱炳亢	1
0	白　井	（白井興業）	FP	楊霊藩	7
2	藤井雄	（武田薬品）	FP	胡亦成	3
0	宮　本	（バウエル）	FP	関香閤	1
2	中　所	（美禰高教）	FP	徐国其	0
2	安　沢	（徳山市役所）	FP	王洪橋	2
1	松　村	（武田薬品）	FP	劉延江	0
1	藤　山	（岐陽中教）	FP	李智連	0
2	藤井真	（武田薬品）	FP	鄧福宝	5
0	西	（出光興産）	FP	荆元崙	1
0	鈴　木	（〃）	FP	卜憲章	4
11	（2）		7MT	（2）	24

全山口は中所、安沢が大いにがんばったが及ばなかった。中国の劉延江が、三十日の北九州大会で指を痛めて欠場したのが寂しかった



下松大会から

日本ナショナルチーム1点差で敗れる
ラフプレーの中国チーム

最終戦

◇最終戦（10月3日、駒沢屋内球技場）

「レフェリー」佐野和夫（教大出）

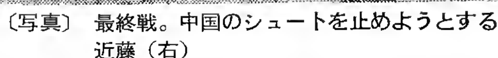
中国 18（10―10 8―7）17 日本

中国、スマートさ欠く

〔評〕スローオフ後、3分してから異様なことに気がついた、というのは、中国チームのプレーである。つまりラフプレーなのだ。日本にはこんなひどいプレーをやるチームはない。まさに驚きである。9月17日の第1戦（対芝浦工大）にみせた中国チームは実にスマートだった。パスミスもほとんどなく、きれいなポストプレー、うまいフェントプレーの連続だった。さすがは中国チームは世界のベスト5にはいると感心していたのだが……。

それがわずか一ヵ月たらずのうちに、こうもプレーが変わるものかと、ただあ然として観戦していた。どこでどうして、こうなったのか、さっぱりわからない。前半16分までに日本は7MTを4本も決める乱戦。しかも中国は〝勝つ〟という意識が働いたのか、毛沢東のために勝つためなのか、とにかくお粗末な試合だった。日本ナショナルチームとの対戦なので、興味があって、しかも得るところが大きいと望んでいただけに、どう見てもこの試合はいただけなかった。中国のプレーには大いにがっかりした。

日本チームもよくなかった。短い合宿だったので、コンビネーションに欠けていたのはやむをえない。大局的に見て、日本チームがよくやったと言っていい。国際試合に経験の少ない選手がほとんどだったから、気分的にあがってしまったのだろう。これを契機に日本ナショナルチームの奮起を強く希望しておきたい。



〔写真〕 最終戦。中国のシュートを止めようとする近藤（右）

得	日本			中国	得
0	尾形	（立大）	GK	陳維政	0
0	竹下	（中大）	GK	曹俊鴿	0
0	青木義	（イーグルス）	FP	朱炳元	0
0	青木孝	（千代田）	FP	楊靈藩	3
1	江名	（全立大）	FP	胡亦成	0
4	北井	（埼玉教員）	FP	関香閣	0
3	近藤	（芝浦工大）	FP	徐国其	0
2	飯端	（関学）	FP	王洪橋	4
0	山田	（芝浦工大）	FP	劉延江	0
1	北村	（立大）	FP	李智連	0
0	大西	（教大）	FP	鄧福宝	2
0	近森	（芝浦工大）	FP	荆元崙	0
6	木野	（立大）	FP	卜憲章	9
17		（5）	7MT	（0）	18

木野、卜の打ち合い

この試合は木野（立大）のロングシュート、卜憲章のアンダーシュートがよかった。木野は強肩、しかもボールはコントロールされ、スピードがあったので、ちょうど矢が突き刺さるようなゴールイン。すばらしいプレーだった。卜憲章のアンダースローも見事だった。第1戦の対芝浦工大戦のときは、うまいフェイントをかけてバックスを抜き、2点をあげていた。この卜憲章が9点のうち4点をアンダーシュートで決めた。これは思いもよらなかった。近藤（芝浦工大）が第1戦で11点をあげたうち、アンダーシュートで4点をあげたのを見て、これをすぐ応用したものと思う。それにしても卜憲章のアンダーはよくはいった。

1点を争う試合

試合は2分飯端（関学）が右45度からロングを決めて先行した。次いで3分30秒木野が7MTを決めて2―0と、すべり出しはなかなかいい。ところが中国はすぐ反撃した。4分卜憲章がゴール真っ正面からアンダーシュート、4分20秒またも卜憲章が日本ボールをカットして持ち込み、5分には日本のパスミスを拾い鄧福宝がゲットしてたちまち中国が3―2とリードした。中国のプレーはしだいに荒くなってきた。日本チームも顔をしかめる。

9分日本は自軍ゴール前で中国ボールを奪って、いざ速攻にはいろうとして誤って中国選手にパスしてしまった。中国はすぐゴール前にいた楊靈藩にパス、楊靈藩はポストプレーで決めて4―2。中国のラフプレーは続く。9分30秒に近藤が7MTを決めて4―3。10分中国は卜憲章がシュート、GK尾形はからだでいったんはボールを止めたが、これがゴールインして5―3。日本は10分30秒に木野が7MTして5―4とし、13分30秒江名（全立大）が左

サイドからフェイント・シュートして5—5と同点にした。このあたり1点を争う好ゲーム。

六たび同点となる

中国は日本へきた当時は一線防御だったのに、この試合は2—4ディフェンスと1—5ディフェンスをうまく併用して速攻体制になっていた。しかも足のある卜憲章が前に出て日本ボールをカットしようと激しく動いていた。中国が2—4ディフェンスであったため、日本は思うように突進できなかった。中国が14分30秒に楊霊藩が突然と中央を割ってゲットすれば、15分木野がフリースローライン付近から豪快なロングシュートをとばして6—6。すると卜憲章が15分20秒にミドルを決めた。日本もすぐ追いつき16分30秒に木野が7MTを決めて7—7と四たびタイ。まさにシーソゲーム。

中国は18分楊霊藩が中央を割り、19分王洪橋が左サイドから決めて9—7とリードしたが、日本も23分にあざやかな山田のリターンパス、これを木野がミドルに決めて9—8。26分30分木野がロングを決めて9—9とまたも同点。動きの荒い中国はむちゃくちゃに打ってくる。27分王洪橋が左サイドぎりぎりから好打して10—9。27分10秒に近藤が得意の左45度からアンダーシュート、これが決まって10—10と六たびタイスコアとなって前半を終わった。

中国、追いつく

後半はまず日本が先手を取った。2分30秒サウスポーの北井(教大出、埼玉教員)がロングを決め、4分近森がポストにいた北村に好パス、小柄の北村は中国選手のホールディングをはずしながらシュートして12—10と日本が2点のリードを奪った。この2点のリードも長く続かなかった。4分30秒王洪橋、5分卜憲章がともにノーマークシュートを決めて12—12。7分には王洪橋が左サイドから14分卜憲章が右サイドから決めて中国が14—12とリードを奪い返した。中国の両サイドからのゆさぶりが成功したわけである。11分日本は北井がミドルを決めれば、11分30秒卜憲章がアンダーシュートして15—13といぜん2点差。

荆が2分間退場 8たび同点となる

中国のラフプレーは相変わらず続く。12分40秒佐野レフェリーは荆元崙に初めて2分間の退場を命じた。中国は荆の退場でストーリング?を始めて少しも攻めない。ところが14分30秒に日本ディフェンスのすきをついて鄧福宝が右15度付近からあざやかなポストプレー。これで得点は16—13と3点の差がついた。この1点は日本にとって痛手となり、敗因につながってしまった。日本は必死に追い駆けた。16分30秒近藤が7MTを決めると、18分、19分に北井が左サイドぎりぎりから決めて16—16と8たび16—16の同点となった。この直後、中国はGKが交代して曹俊鴿が出た(陳維政が負傷したため)。

卜憲章のアンダーシュート

残り時間は10分。これからが勝負どころ。両チームとも激しくアタックする。中国は22分、25分に卜憲章がアンダーシュートして18—16とした。日本も26分飯端が中央からロングをとばして18—17と1点差。試合は1点をめぐってますます激しさを加えた。観衆は総立ちになって声援する。日本は攻めて攻めて攻めまくったが、タイスコアにできなかった。タイムアップ寸前に江名(全立大)が左サイドからシュート。ゴールイン、18—18のタイムになったかと思った瞬間、ボールはゴールポストに当たってはね返り、中国ボールとなってしまった。試合はそこまで。やがて試合終了を告げるホイッスル。

日本チーム健闘

中国は両サイド攻撃、アンダシュートをマスターして日本に対した。第1戦のダブルポストはほとんどなく、体力にまかせて日本選手に激しくボディーチェックの作戦に出た。前半に退場のケースはいくらもあった。しかし中国チームの勝利への執念は恐しいほどであった。勝つためには手段を選ばないプレーは感心できない。毛沢東思想の現われといったら、言い過ぎだろうか。一方、わずか5日間の合宿でここまできた日本のチームの健闘をほめていいと思う。



〔写真〕最終戦。近藤のシュートを中国選手は両手で抱え込む。

日中親善試合を顧みて

高嶋　洌
（日本協会理事長）

すさまじい闘志を、私は久しぶりに目のあたりに見ることができた。それは十月三日の夜、対全日本の試合をやっている中国チームに…。

スポーツとは、根底に遊技性をもち、技術性を追求する身体活動であると、簡単にはいわれている。もちろん、そのなかには精神的なものもいわれているし、かつて学生野球の父といわれた故飛田穂洲氏は『スポーツとは勝つものである。負ければ勝つまでやるものであり、勝てば負けないようにやるものである』といわれたが、当日の中国チームはそんな生やさしいものではなかった。

試合前、円陣を作って毛沢東語録を合唱したときは、三千の観衆は鬼気迫るものを感じたのではないだろうか。少なくとも私は、そこに勝たなければならないのだ―という悲壮な使命感といったものを感じた。競技中に、想像できないような荒いプレーは、以上のような素地から盛り立ったものであると考えてやりたい。

競技技術については特別に見るべきものはなかったが、徹底して基礎技術をマスターしていることによる強さを発揮した。パスの早さと正確さ、ハンドリングの正確さ、ボールへの執着、走ることへの意思力の反映など、すでに何べんとなく言い古されたことである。私も常に注意を喚起してきたことであるが、あらためて重要さを認識させられたことであろう。基礎技術といえば、卜憲章君のシュートに見事であった。大げさになるが、彼の右45度からの単純なシュートに、日本に敗れたといっても過言ではない。

ひるがえって日本チームを考えたとき、1点に泣いたが、決して悲しむことはない。むしろ前途に明るいものを見出したとさえいえるのではないだろうか。若くて、しかも平均球歴7〜8年しかならない選手諸君が、あれだけのプレーができたことは今後の指導によって無限の可能性を秘めるものであり、期待してやまないものである。

ただ一つ、最後に対中国戦を離れて私は全国のハンドボールの指導者と選手に申し上げたい。

一、競技するからには勝たなければならない。

二、そのためには、なにごとも相手より早く、強くやらなければなれない。

三、勝つという気迫を、からだ全体で現わそう。そうすれば、相手ところんでも、早く起きるだろう。

（了）

☆　☆

勝利への執着に終始
よい体験か、若い全日本

……杉山　茂……

翌日の各紙が筆をそろえて批評したように、内容はたしかにラフ・ゲームであった。すさまじい闘志のぶつかり合いというよりも、異常な執念の激突であった。その背景は?。

中国は社会主義国家建設を旗印に、今回の日本遠征も〃国のため〃という精神が選手たちと支配していた。地方での親善試合はともかく、最後の全日本戦はそれだけに絶対に負けられぬものであり〃毛主席語録〃を片手に会場へ登場したのでもそれがじゅうぶんわかる。

それまでの8戦は、日本側の交代選手をほとんど無制限に認めていたが、全日本戦だけは自分たちと同じ人数（13人。注・公式規則の制限は11人）主張し、日本側もそれを受け入れた。そうした細心さもナショナル・ゲームは絶対に勝たねばならぬという執念にほかならない。一方の全日本も〃国家意識〃という背景こそなかったが、球界のさまざまな動きも思惑を背にしているだけに、緊張の度合いは中国と同じであったにちがいない。

試合前4人のコーチ陣と会って話したが、そのやりとりはこんなものだった。

――選手たちの調子は…。

コーチ　よいとか悪いとかいっている余裕はありません。

――どんな作戦ですか。

コーチ　絶対勝つという方法を教えてほしいところです。

――きょうの先発メンバーが世界選手権でも主力ですか。

コーチ　そんな先のことはわからない。きょうしか考えてない。

――満員ですョ。よい試合を見せてください。

コーチ　ギッチョ（卜憲章選手のこと）さえ押えればいける。それにしても5日ばかりの合宿で、大変なゲーをやらされるものだ。

×　×　×

〃勝つ〃〃勝ちたい〃という二つのすさまじいばかりの執着心は、八度び同点の接戦を演じたものの〃大あじ〃な展開に終始した。めまぐるしいスコアの変化に一喜一憂した三千の観衆には、おもしろい試合だった。すごい試合だったとすなおにふりかえられたろうか。

勝負を決めたのはキャリアの差ともいえ、この日の敗戦で、現役学生中心の若い全日本が、ナショナルチーム同士の対戦がいかに勝利への執着に充満したものであるかを体験したならば、世界選手権に役立つことも多いハズである。

（了）

速攻の東軍が2連勝

第16回全日本学生選抜東西対抗戦は9月18日名古屋の愛知県体育館で約三千の観衆を集めて開かれた。東軍は前半一時リードを奪われたが、すぐに追いつき、後半も見事な速攻で2連勝を飾った。通算成績はこれで東軍9勝、西軍7勝。なおこの試合は日・中親善第2戦に先立って開かれた。

東軍 26（13―10 13―12）22 西軍

〔評〕東軍は前夜、中国と対戦した近藤、近森らの芝浦工大勢を加えずにスタート。そのためか得意の速攻が出ず、西軍のテンポで試合が進んだ。西軍は立ち上がり木野の好技に2点を許したが、すぐ同点にした。林をゲームメーカーにして、予想どおり飯端、飯田の前身コンビによる豪快なシュートを生かす戦法をとつて、得点を重ねた。しかし東軍は前半15分5―8とリードされたところで、芝工大勢が加わって猛反撃。速い動きから短いパスをつないで西軍のディフェンスをくずし、5分間に7点を奪い、前半20分には12―10と逆に優位に立った。

後半、西軍もよく粘り、再三タイ・スコアに持ち込んだが、どうしてもリードを奪えない。このあたり世界選手権候補8人をそろえた東軍の地力を示すもので、追われながらも余裕があった。（球）

【FPその他の出場者】▽東軍 旗野（早大）角（愛知教大）新田（東北学院大）森井（富山大）▽西軍 窪崎（関大）柴田（西南学院大）＝久光（甲南大）安藤（岡山大）＝いずれも得点0

得	【西　軍】		【東　軍】	得
0	林谷（同大）	GK	尾形（立大）	0
0	平松（関大）	GK	竹下（中大）	0
2	林（同大）	FP	木野（立大）	7
7	飯田（同大）	FP	北村（立大）	6
2	守本（同大）	FP	大西（東教大）	2
8	飯端（関学）	FP	神谷（日体大）	1
0	高須（関学）	FP	黒川（中京大）	0
1	宮永（関大）	FP	小椋（慶大）	1
1	市橋（京大）	FP	毛利（明大）	1
0	西野（関学）	FP	近藤（芝工大）	3
1	五島（西南学）	FP	関根（芝工大）	0
0	福田（甲南大）	FP	近森（芝工大）	5
22	（2）	7MT	（2）	26

全日本教職員選手権総評

危害防止に注意せよ



磯部　浩

教職員大会は学校ハンドボールの指導者であり、普及の推進力である先生方が技術の練磨と向上を目ざし、自らゲームをすることによって研修しようとする意義ある大会である。地域的にみて、参加チームの増加が予想されたが、西日本関係が多く関東近県、北日本の不参加が寂しかった。遠距離を押して参加した西日本勢から3チームが入賞したが、その熱意と努力は賞していい。実業団チームが続々誕生している現在、本大会の参加チームが伸び悩んでいることとは、普及の面からも一考を要する問題である。

優勝した大阪イーグルスは昨年同様のメンバーで、研究心と豊富な練習量により一段と競技力が向上した。鋭い出足と多彩なパスワーク、巧な試合運びで優勝した。準優勝の岐阜教員は昨年よりも強化され、若さとスピードで後半18分に21―21の同点に迫り、決勝にふさわしい熱戦を展開した。大分教員は国体開催を目前にして強化のあとがみられた。

神奈川教員、埼玉教員の善戦、茨城教員の逆転勝ちなどが目だったが、いずれもいま一歩の努力が望まれる。

全体的に各チームは大会の意義を理解し、研究的にゲームを展開して大きな収穫をあげた。しかしゲームのスピード化と攻守の激しさから17試合中24例のけがが発生した。とくに腹部、頭部の強打によるショック症状など危険な例もあり、試合が進むにつれて多発した。幸い救護医（高倉博士）の献身的な手当てによりスムースに処置されたが、ゲーム内容も危害防止に留意しなければならない。

茨城県は国体誘致を目標に県当局、県協会がともに努力しているが、全日本級の大きな大会を開催した経験がなく心配された。しかし選手のまじめなプレーと県の熱意、役員の一致協力により有意義であった。（競技副委員長）

全国ハンドボール少年団交歓会に参加して

おとなも子供も



大川和夫
（神奈川県協会常任理事）

狭い校庭や町の中の広場で練習や遊びに時間を使っている子供たちに、緑の芝ふでの交歓会は夏休み中のよい思い出の一日であったろう。連絡打ち合わせにじゅうぶんの時間が持てなかったが、会が盛大に、子供の生々した顔が夏の強い太陽にぎらぎら照らされている姿を見たとき、ほんとうに愉快であった。この日は協会役員、地区、県市の方々も子供たちから〝おじさん〟と呼ばれていっしょにボールに触れることができた。おとなたちが子供に負けまいと、額に汗して走り、また子供はボールを取られまいとがんばるゲーム。

きょう初めてボールに触れた多くの子供たちも、午後からの練習では紅白に分かれてゲームをしている。もし時間に余裕があったなら、夕暮れまで競技場内を走り回らせたかかった。会場の運営については研究の余地はいろいろあると思うが、会場入り口に設置展示した各国からのペナントには、子供たちの関心が集められた。今後写真、スライド、映画などからハンドボールを子供たちに理解させていたら、案外おもしろいかもしれまい。指導については実業団女子チームがこれに当たったが、彼女たちの誠意と親切とが参加者に非常な好感を与え、交歓会のふんいきを盛り上げる結果となり、実業団チームに感謝したい。

またハンドボール小年団の今後の育て方についてはじゅうぶん研究していきたい。この一日が子供たちに悔いのない日であったことを、各方面から協力してくださった方々に感謝します。

毎日練習したい



藤田基興
（横浜市・港南中学）

私たちのハンドボール少年団は、8月17日に横浜・三ッ沢競技場で開かれたハンドボール少年団全国交歓会に参加した。集合の軽井沢中学でユニホームとストッキングを受け取り、少年団のユニホームに着替えてすぐに少年団旗を先頭に競技場へ行った。会場に着いて会場を見渡して、こんな広々としたところで、毎日練習したいものだと思った。競技場の前にはハンドボールの国際試合のペナントがたくさん展示してあった。とくに北京と書かれたペナントが目についた。ハンドボールを「手球」というのはおもしろい。新潟県の柏崎の友だちも参加し、ハンドボール少年団の開会式が始まった。僕は柏崎の人とペナントを交換した。このあと僕たちは実業団の試合を見学し、練習にはいった。

僕はハンドボール少年団に参加して、ふだん遊び場所のない少年が、ハンドボールを通して広々とした競技場を開放してもらって練習をしゲームをすることは、少年の健康を保ち、日本のハンドボールの底辺拡充になると思う。このハンドボール少年団を通して日本のハンドボール少年の交流を深めて、この少年団をもっと盛んにしていきたいものだ。

意義ある催し



田中豊
（万騎ガ原中学）

僕たちはその日、三ッ沢競技場に近い軽井沢中学校へ集まった。そのなかに市、県大会などで顔を合わせた顔ぶれが見られた。ユニホームに着替える。えり、そでに白いふちどりのある紺の半そでのシャツ、胸には四角の朱色地に白でハンドボールの模様と頭文字の「H」がはいっている。ユニホームを着ると、みんなはいつもと違って見える。どことなく幼稚っぽい。だが、気持ちはひきしまる。

会場へ行く。晴れあがった空、青い芝ふ。いよいよ開会式。旗を持つ手にも力がはいる。会長さんのあいさつ。続いて特別参加の新潟県の少年団の紹介。式が進むにつれ、活気づく。その後、一般女子の試合が公開された。

次は僕たちの練習である。さきほど試合を見せてくれた女子た実業団の人に指導してもらう。なにか気はずかしい。初めは例のとおりパス、キャッチ。それからロングパスもやる。シュートもする。芝ふなので、ころんでも痛くはないが、やはり感じが違う。

ホイッスルが鳴ると一瞬、緊張する。点はともかく、思い切ったた試合をやった。おもしろかった。

☆　☆

エールフランス

パリへの直行便 〈北極回り〉



ビジネスでヨーロッパへ旅行されるお客さまのために、エールフランスでは〈北極回り〉にボーイング707ジェット機を就航させております。

北極回り　東京発　午後　10時30分　〈水・土〉
　　　　　パリ着　翌朝　9時5分

パリを中心として、ヨーロッパの各地にエールフランスの航空網が縦横にひろがっております。またエールフランスでは日本のお客さまのために、機上には日本人スチュワーデスを、ヨーロッパの各主要都市には21名の日本人駐在員を配置し、常にお客さまのお世話をいたしております。なお、南回りは〈月・火・木・土・日〉の午前10時30分パリへ向け就航しております。

AIR FRANCE

LE PLUS GRAND RÉSEAU DU MONDE

à Votre Service





東京都港区赤坂溜池　エールフランスビル　電話（584）1171代表　　東京都千代田区日比谷　三井ビル　電話（501）6331代表
大阪市東区大川町淀屋橋　勧銀ビル　電話（202）6326代表　　名古屋市中村区広井町3—88　大名古屋ビル　電話（54）0540

時評

フェアプレーでいこう

中国チームは8勝1敗の成績を残して10月5日羽田から帰国した。第1戦にみせた中国チームは実にスマートで、日本のファンに好印象を与えた。ヨーロッパ式の一線防備、ダブルポスト、的確なパスワーク、ミスがほとんどなかった。それにあの大柄なのに、巧みにかけるフェイントプレー。第1戦に限っては非の打ちどころがなく、むしろ日本チームとしては学ぶべき点がいろいろあった。

ところがである。最終戦の日本ナショナルチームとの試合を見て「これが中国チームか」と驚いてしまった。わずか一カ月たらずのうちにプレーが一変してしまった。ラフプレーの連続である。相手が日本ナショナルチームなので、負けてはならない―という意識があったのか、ものすごいホールディング、ひっかけ、ひっぱるなどのプレーが連発した。前半に退場ケースはいくらもあった。レフェリーは前半に4回の7MTを日本に与えるほど。新聞記者席から「中国はスマートなチームと聞いていたが、これはいったいどうしたの」とびっくりするほど。

10月4日付けの朝日新聞には「中国、執念で全日本降す」「手段選ばぬ中国」と題して、中国チームのプレーを次のように説明した。「中国の勝利に対する執念はすごかった。むしろ〝勝つためには手段を選ばず〟といったアン・フェアなプレーが随所にみられ、前半で四つ、後半で一つの7メートルスローを取られたあたりは、日本で考えられているスポーツマンシップとはおよそかけ離れたひどいものだった」と報じたくらい。ハンドボールファンの朝日新聞の渡辺邦記者の目にも、中国のラフプレーが目に映ったわけ。それほど中国のプレーはひどかった。

「人のふり見て、我がふり直せ」と古いことわざがある。われわれ日本選手は、スポーツマンシップに基づいて堂々とプレーすることを、このさい特に希望しておきたい。スポーツはフェアでなくてはいけない。フェアの精神を忘れるようでは、その人にはスポーツをやる資格は全くない。スポーツは勝たなくてはダメ。しかし、勝つためにどんなことをしてもいいというやり方は民主主義の現在では通用しないし、もしそのプレーヤーが社会にとび出しても社会の人は見向きもしない。やがては落伍していくのみだ。ハンドボールを愛好する選手たちは、決してアン・フェアなプレー生活をしてはいけない。手段を選ばずにアン・フェアなプレーで勝ったところで、回りの人は少しもほめてくれない。ルールをよく守り、正々堂々とプレーすれば、勝利への道は自然に聞かれていくものだ。そういうことをよく知ってほしい。フェアプレーでいこう。（喜）

★　★　★

楽書き帖

"竹野がいたらな……"

鷲尾武治

○…日本ナショナル・チーム対中国戦は18―17で日本が1点差に泣いた。私の隣にいた中日新聞の吉田記者が「大崎電気の竹野がいたらなー。どうして出場しなかったんだろう。このプリントを見ると、竹野はじめ大崎電気の選手がはいっているのに……。竹野がいたら、きっと楽勝していたと思う」としきりに残念がっていた。大崎電気の竹野、福本、北村、金田、井上の5人は、会社の仕事のつごうで強化合宿に参加できなかった。一般観覧席には、仕事を終えて駆けつけた竹野がいた。日本ナンバーワンの竹野にしてみたら、このゲームを見て、おそらく心残りだったと思う。でも竹野の次の世代をになう木野（立大）近森（芝浦工大）飯端（関学）の大型選手が顔をそろえたのは、日本チームの将来に明るい望が持てた。

○…10月1日、強化合宿にはいっていた村田弘先生に電話をかけていろいろ聞いてみた。村田先生いわく「当面の目標は中国に勝つこと。これ以外にありません。大型選手がいるので楽しみです」。そこで試合当日、村田先生はじめ稲石、勝、中沢各氏に「何点差で勝つか？」と聞いたら、口をそろえて「1点差で勝つ」とはね返ってきた。それが逆目と出て1点差に泣いた。勝負というものはわからない。役員にてしみれば、泣くに泣けなかったろう。その気持ち、よくわかります。次の目標は来年1月の世界選手権大会だ。さあーフンドシを締め直してがんばってほしい。

○…第1戦の横浜文化体育館は大入り満員、地元神奈川県協会のご苦労がよくわかる。最終戦の駒沢屋内球技場もみんなの努力で満員になった。バレーボールやバスケットボールのように、黙っていても満員になるのとちがい、ハンドボール界はいつも苦労する。しかしこの苦労もやがては実を結ぶときがくる。私はそれを待っている。1972年のミュンヘン・オリンピツーに正式種目として36年ぶりに登場するハンドボール。日がたつにつれてスポーツファンの目もしだいにハンドボールに注がれてくる。それは当然のことと思う。苦労の積み重ねを忘れてはいけない。いつの日にか「大入り満員」「札どめ」ということになろう。こうなる日が一日も早くくることを祈るのみ。

○…9月17日の日中第1戦の前に、横浜文化体育館で「全国ハンドボール少年団結成大会」が開かれた。少年少女で広いコートがいっぱい。コートのフロアが見えないくらい。下は小学校三年生から上は高校三年生まで。そろいのユニホームを着て元気いっぱい走り回っていた。「ハンドボールっておもしろいよ」―これが少年たちの感想だった。

★　★

西ドイツの技術研究(6)

3:3攻撃から2:4攻撃へ(1)

訳 藤本 強
(日本協会理事)

3：3攻撃から2：4攻撃へ

この3：3攻撃から2：4攻撃に変化して守備陣にすきをつくる方法については、すでにその概略をとりあげたことがある。今度は実際上のいくつかのフォーメーションについて、練習法を考え、さらにその応用を考えていこう。

ハンドボールにおいては、定形化したフォーメーションは必要なものではあるが、フォーメーションの優秀さ以上に要求されるのは、選手個人の状況にたいするの適切な判断とその判断を基礎としたプレーである。このように1秒の時間を争う状況の判断、それに対応したプレーをフォーメーションの基礎を養成しながら覚え込ませる。これはいまから述べるフォーメーションの練習形は、きわめて有効なものである。

一般的通則

エリアにいる3人の選手は、それぞれの自由に動ける余地を確保しておくとともに、自分の相手になっている守備選手を引きつけておくことが必要である。エリアにいる3人の選手はいつパスがきてもそれをキャッチし、次の動作に移れるようにしていなければならない。

3人の浮いた位置にある選手は、それぞれのポジションを交代しながらその深さを保ちつつ、以下に述べる戦術の基礎をのみ込んでいなければならない。

(1) 守備の前に出た選手の後ろを斜めに走り、エリアにはいり自由に動けるようにする。

(2) エリア中央にはいっている攻撃側の選手の動きを、常に注意していなければならない。

(3) ボールは走る方向と並行にパスされる。

(4) 隣にいる選手がノーマークになるような位置に、すばやくはいり込むこと。

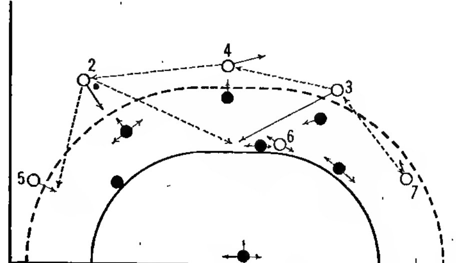
【注意すること】

守備陣形と攻撃陣形との構えによっては、戦術をそれに合わせて変化させることが必要となる。この変化はボールの方向と走る方向をちょっと変えるだけで達成できる。このように状況に適応して変化させることは、非常に重要であることはいうまでもない。

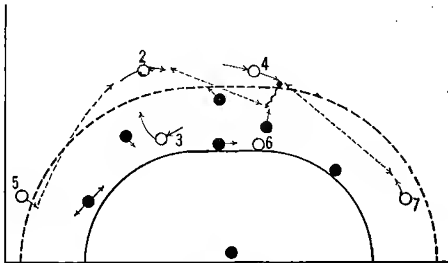
【実際の練習形】

(第1・2図参照)

(1) 浮いた位置にいる選手3は7にパスして、前に出ている守備選手の後ろを通り、エリアラインの中央にはいり込み、2：4攻



第1図



第2図

撃フォーメーションをつくりあげるとともに、右サイドに重圧をかけるようになる。ボールの動きと走り方はこれを利用する。

(2) ボールを持っている選手2は前に進み、守備選手を引きつけたあと、3か5にボールをパスする。さらにリターンパスを受け取る。

(3) 選手4は前に出た守備選手をはずし、ボールを持ち、それをさらに7にパスをする。

(4) 選手2は4と同じ方向に動く。同時に3はエリアから抜け出し、再び3：3攻撃フォーメーションに戻る。

(5) 7はボールを4に返す。これを繰り返す。

【注意点】

(1) 練習の基礎として、まず守備選手とボールの方向の関係をじゅうぶんに知っておかなければならない。それは次のようなことである。

(A) 走るのが途切れてはいけない。

(B) 相手の動きに応じで、あらゆる種類のパスとキャッチをすること。

(C) ゲームの展開にかんする見通しをもっていること。

(2) タイミングについてはじゅうぶんに強調すること。

(3) 繰り返し走ること。つねに走っていることはチームにとって力になるとともに、安全でもあることを教える。

(4) 初めはゆっくりプレーし、守備側の選手とボールとの関係を選手自身によって納得させ、ボールを離すタイミングをも自分で会得させる。

3：3攻撃から2：4攻撃への移行期にはパスをするところは一カ所に限らない。二カ所も三カ所も四カ所も、極端にいうならば五カ所も生まれる。したがって、このときのパスの方向は非常に重要なものとなってくる（第3図）。

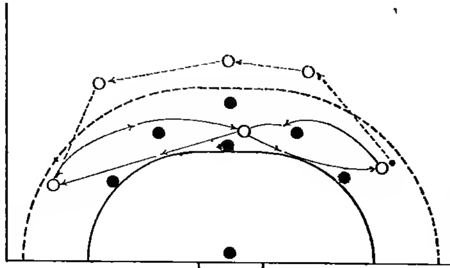
守備のスキ

第 3 図

(5) もしチームに左利きの選手がいたならば、右サイドに置くのがよいと思われる。これらの変化のあとでは、浮いた選手はそれぞれ位置を替える。それによって

エリアに近づいてはならない。もちろんエリアにいる選手と浮いている選手とが変わることは非常によいことであり、これによってゴールのチャンスがつかめることが多い。

浮いた位置の選手の走りは、エリアにいるプレーヤーたちの動きに合せなければならない。3人のエリアプレーヤーの走り方は、つねに流れるように走っていなければならない（第4図参照）。


第 4 図

攻撃の幅と深さをじゅうぶんに保つため、このエリアにいる3人の動きは非常に重要である。以下のことに気をつけて走ってほしい。

（つづく）

世界選手権記録続き

▽D組

デンマーク	22－16	ポーランド
ポーランド	27－19	アイスランド
デンマーク	17－12	アイスランド
デンマーク	23－20	アイスランド
ポーランド	18－14	デンマーク
アイスランド	23－21	ポーランド

〔順位〕①デンマーク②ポーランド2③アイスランド

▽E組

ハンガリー	24－15	スペイン
フランス	14－14	スペイン
フランス	10－10	ハンガリー
ハンガリー	26－17	スペイン
フランス	22－12	スペイン
ハンガリー	31－17	フランス

〔順位〕①ハンガリ②フランス③スペイン

▽アフリカゾーン　チュニジア

▽米国ゾーン

米国	26－24	カナダ
カナダ	30－17	米国

▽地中海ゾーン

ユーゴ	23－11	イスラエル
ユーゴ	19－11	イスラエル

〔海外スコープ〕

男女とも東ドイツ優勝 ヨーロッパカップ

1965年度

昨年度のヨーロッパ杯は各地で開かれたが、男女とも東ドイツが、しかも同じライプチッヒ・チームが優勝するという偉業をなし遂げた。東ドイツが男女ともヨーロッパ杯を獲得したのはこれが初めてである。60年代の初めルーマニアを中心として動いていたヨーロッパ・ハンドボール界にも、新しい嵐が吹き始めた。このことはかなり予想外のことではあるが、全然予測されなかったことではなかった。昨シーズンの試合で東ドイツは、ルーマニアを破ったユーゴに勝っている（20号既報）。今度の世界選手権の予選でも圧倒的な強さをみせていた。これらのことから一部には、来年1月の世界選手権も東ドイツが優勝するのではないかと予想している人もいるほどである。



ティデマンのシュート



優勝した東ドイツ（男）

〔女子決勝〕

ライプチッヒ 10（4—3、6—2）5 コペンハーゲン

得	ライプチッセ		コペンハーゲン	得
0	ツォバー	GK	ポールセン	0
		GK	ニールセン	0
0	ヒュスナー	FP	ゼーレンセン	2
2	チンメルマン	FP	レフハウゲ	1
5	リユードリッヒ	FP	クリステンセン	1
1	マイセル	FP	クリスチャンセン	1
1	ミュラー	FP	ビルケモーゼ	0
1	コーン	FP	クジナルスン	0
0	ヘルビッヒ	FP	ニルソン	0
0	ヘルマン	FP	ヘンリクセン	0
0	ブラウル	FP	エスベンセン	0
		FP	ヨルゲンセン	0
10				5

昨年の勝者HG・コペンハーゲン（デンマーク）とSC・ライプチッヒ（東ドイツ）の間で争われた。この第1戦はまずコペンハーゲンで聞かれ、SC・ライプチッヒが勝ち、第2戦はライプチッヒで開かれた。

試合はライプチッヒ市の室内競技場。前半は4—3とライプチッヒが1点リードした。後半ライプチッヒは連続4ゴールを決めて8—3と差をつけ、試合を決定的なものにした。コペンハーゲンは反撃し2点を奪ったが、ライプチッヒも2点を追加し、10—5で初優勝した。

〔男子決勝〕

ライプチッヒ 16（9—7、7—7）14 ブダペスト

得	ライプチッヒ		ブダペスト	得
0	フランケ	GK	スツェプラキ	0
0	エルザッツ	GK	バド	0
0	ランド	FP	カダラベク	0
2	ラングホック	FP	バルガ	0
8	ティデマン	FP	フェンヨ	2
1	エイヒホーン	FP	ビトカイ	3
2	カルデラッシュ	FP	コバックス	6
2	ヘールクル	FP	ブランスタイナー	0
0	ミュミット	FP	アドルヤン	2
1	ベーラー	FP	モリァール	1
0	ナイリング	FP	ロツェシベルキ	0
16				14

パリのクーベルタン・スタジアムで開かれた。IHFのプチ・モンゴベール副会長も出席し、観衆は四千を数えた。レフェリーは往年のスイスの国際的名選手ハヨ・ベルトシンガー氏。DHFK・ライプチッヒ（東ドイツ）対ハンベント・ブダプスト（ハンガリー）の試合である。

試合開始後、まもなく東ドイツは快調に自己のペースで試合を進め、6—2とリードしたが、ハンガリーの追い上げで前半は9—7と2点差。後半は一進一退。レフェリーのハヨ・ベルトシンガー氏はラフ・プレーをきらい、7MTをとることで有名審判だが、この試合でも多くの7MTをとった。ライプチッヒに3本、ブダペストに4本と一試合に7本の7MTがとれらた。

ライプチッヒは、13—12、15—14とリードを続けた。15—14のとき、ハンガリーに同点のチャンスが訪れたが、このライプチッヒのピンチを救ったのは、名GKといわれているクラウス・フランケのファインプレーである。タイムアップ1分前に東ドイツは、世界的名選手ポウル・ティデマンはきれいなシュートを決め、ブダペストを破って優勝した。

攻めのティデマンは3本の7MTを決め、勝因となった。守のクラウス・フランケのファインプレーも見落とすことはできない。

× × × ×

テレビスポーツ教室

NHKは、10月30日と11月6日の教育テレビ〃テレビ・スポーツ教室〃でハンドボールをとりあげる。

第1日は基本技と個人技。第2日はチームプレーの二つに分けて放送されるが、今回は技術的な解説よりも、指導者のリードに重点がおかれ、これまでとは違った角度からの〃教室〃になっている。指導と解説は稲石三二氏（日本協会普及委員）。実技は桜台高校ハンドボール部。放送時間は両日とも午前9時から1時間。

―パトロール―

私とハンドボール



伊藤宗一

戦争の傷あとも徐々にいやされ、生徒の顔色も多少生気を取り戻し始めた昭和23年ごろ。私たち体育指導者は用具不足に恵まれず、苦しい毎日が続きました。不足どころか、なにもない状態といってよかった。とくに冬の体育学習にはサッカー、バスケットボールなどの球技が適していると知りつつも、ボールがない状態なのでゴールがあるはずがない。また生徒は運動靴がなく、はだしでいるときである。

基礎体力の走る、とぶ、投げる運動が含まれるハンドボール形式のものが冬の球技として最も適切であるとのことから、有志が集まって研究を始めた。当時はハンドボールの体験者もなく、その指導法など闇夜に手探りのありさまだったが、教科指導としての前進がはじめられた。このようなときに第5回国体が愛知県下で開かれた。この機会に名古屋市ハンドボール協会も結成され、第一回ハンドボール大会が開かれた。校内の体育活動のみの時代から、対外競技に参加できる日が訪れたのである。こうなると、指導技術はもちろんのこと審判法が必要になり、互いに研究するとともに、協会から指導者の派遣をお願いするなど技術の向上に努めた。そして練習法やルールの研究したものをプリントにして全市の小、中学校に配布し、必要に応じて実技の指導を繰り返し実施し、ハンドボールの普及につとめた。

その努力が実って昭和26年名古屋市学校体育連盟にハンドボール部が設けられ、中学校は大会、小学校は指導会を開催することができるようになった。適切な指導と研究がハンドボールの普及の基礎ではあるが、大会の持つ意義はそれ以上のものがある。「この年」こそ、名古屋市小中学校のハンドボールが輝かしい第一歩を印したのである。このころは中学校体育指導要領にハンドボールも含まれ、名古屋市の実技講習にもとり入れられ普及の速度が早められた。

大会は研究に集まった人、関心のある方全部の協力で運営された。競技の実施に当たっては教育指導を重視、初心者の多いチームの参加を容易にするように配慮した。こうして運営に参加した先生がたが自校にチームを、さらに次の転任校に新チームを結成するなど年を追うごとに大会参加チームが増加した。

その後、中学校の体育指導要領からハンドボールがはずされたことからいくぶんの停滞はあった。現在ではレベルの高い県の高校でハンドボールを体験し、さらに大学を経て教職に就かれた新進気鋭の指導者が多くなり、これらの人たちの力で第二の発展期を迎えている。最後に望むことは、中学校の体育指導要領にハンドボールが復活し、第三の発展充実を迎えるべく関係者の活動協力を念願してやみません。

（元名古屋市学校体育連盟ハンドボール部長）

―パトロール―

征子がんばれ！

レナウン、一年ぶりに出場



渡辺征子さん

8月の全日本総合選手権大会の女子の部に昭島クラブ（東京）が出場した。東京以外の人には聞きなれないチームである。このチームはレナウン工業（東京）の先輩チーム。つまり現役を引退した山田帆浪、竹本千恵子さんといったおねえさん選手に現役の渡辺征子、柿沼芙美さん、新山昭子さん、それに新人を含めたもの。このほか現役チームのレナウン工業チームが登録されている。

なにしろこの昭島クラブの選手たちは、一年ぶりの公式試合とあって張り切っていた。そればかりではない。鈴木社長が日本協会の会長代理として会場の浦和市立高校に姿を見せたからでもある。1回戦で深谷女子高校を15―6で破ると、その日は全試合終了後に体育館で練習試合。ボールを握るのが、うれしくてたまらないといった表情。渡辺征子（せいこ）さんは終始ニコニコしてボールを追い駆け、昔のスピードは少しも落ちていない。ただ試合から遠のいていたためか、コンビネーションがよくなかった。この練習試合を見ていた顔見知りの一人が「征子、がんばれよ」と声をかけたら「だいじょうぶよ。このとおり元気いっぱいです」とおうむ返しに元気な声がとんできた。一年間基礎練習はやってきたというだけあって、動きそのものは昔と変わらない。だが、準々決勝で大洋デパートに7―18で敗れた。しかし負けてもその表情は意外に明るかった。

監督の塩川安賢君は「ことしの小手だめしです。なかなかやるでしょう。優勝だなんて、大それたことは少しも考えていない。選手たちが伸び伸びと試合をしているので安心しました。全日本選抜選手権、東京都選手権、全日本実業団選手権と大会があるので、徐々にピッチを上げていこうと思っています。あせらずに一歩一歩やっていくのが近道でしょう」と抱負を話していた。

（了）

あすへの希望

大東高（岩手）

四方を山に囲まれ、新鮮な空気、澄み切った空の下で私たちは一日も早く、全国の仲間入りができることを夢みながら、部員一丸となって練習に励んでいます。



金子教子 さん

私たちのクラブは発足して、まだ一歳にも満たない生まれたての赤ん坊といったところです。見るもの、聞くもの、すべて新しいことばかり……。これから一つ一つ身につけて、みんなに追いつかなければと思っています。地理的にいって中心地より離れています。練習試合をする機会も少なく、また冬季期間の練習場所にも恵まれないという悪条件がありますが、私たちはそんなことには負けてはいられません。この悪条件を克服していかなければ……。

岩手県立大東高校大原分校―これが私たちの学校です。ハンドボールは独立しています。部員二十人たらずのクラブですが、みんなの夢は県大会に出場することです。私たちはあすへの希望に向かって、みんなでがんばっています。

（主将　金野教子）

勉強とハンドボール

玉川高（東京）

ハンドボールを始めようと決心したとき、じゅうぶんこの点について考えたつもりであったが、やはり今でも私にとっては大きな問題になっている。それは



石岡敬子 さん

「クラブと勉強」という難物である。両立すると堅く信じていても、学校の成績は上がろうともしない。それが自分に努力がたりないためとわかっていても、心の中ではそれを見過ごしてしまっていることが多いと思う。まるでクラブ活動をしていれば、成績を下げないようにするだけでも偉いことであるかのように……。このことを考えるとき、いつも私は恐しさといったようなものを感じる。特に成績を下げるということもなく、両方をうまくやっているということで自分が満足してしまい、両方がいいかげんなものになってしまうのではないかと。こんなことを考えて恐しいと感じるうちはよいが、やがては、それも忘れてしまうのではないかと。いつも自分をきびしく見つめたいと願っています。最後にハンドボールを始めて、非常に得たところがたくさんあったことはいうまでもない。

（石岡敬子）

ハンドボールを友に

常北高（茨城）

ハンドボールこそ僕らのものだ…。チームワークの尊さ、根性、気合い。これこそ若人に必要な条件だ。5年の間、想像も絶するような幾多の苦しさ。これをゴールへボールをぶっつけては消してきた僕らには、今の生きがいはハンドボールにある。そして「僕らに不可能ということはない。ただ前進あるのみ」といったことばを教えてくれたのも、ハンドボールである。僕らはこのことばを信じています。そして男であるなら、どうせやるなら自分のものに、またあこがれのオリンピックに目標を定め、そこへ永久にハンドボールを友としたい。



立原定宗 君

17歳という危険年齢にある若い僕らに、希望や勇気を与えてくれるハンドボール。どんな苦しみでも楽しみとすることができるのも興味あるこのスポーツがあるからだ。全神経を使って飛びつくキーパー。小さきゴールにボールを入れようとするシューターの姿。なんと美しい姿であろう。現代の若人は、この姿を見のがしてはならない。

（主将　立原定宗）

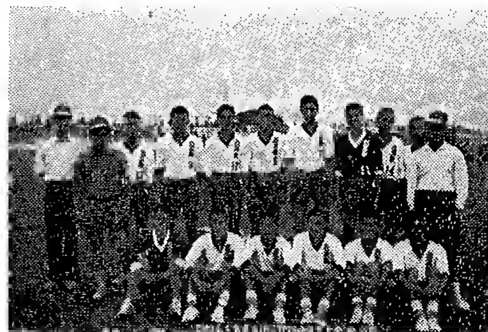
伝統を育てよう

西宮東高（兵庫）

西宮市立西宮東高等学校。全国の人にはあまり知られていない新設四年の学校である。高校野球で有名な甲子園球場のすぐ横に広々としたグラウンドを持った学校です。そのグラウンドに赤と白のゴールポストが置かれたのは、二年前の夏休みだったとのこと。経験のない一年生十二人が教材用のゴムボールで練習を始めたが、だれ一人としてハンドボールの経験がなく、なかには中学校でクラブ活動をしていない者が半数を占めていた。

苦節二年。だれ一人と退部するものがなく、ことしは部員も三十六人にふえ、毎日二時間の練習に励んだ。「試合に勝とう」を合いことばに、またクラブと学習との両立を目標にしました。その努力がことし初めての全国大会出場をなし遂げた。受験準備に切り替えた先輩（三年生）が、われわれ中心の新チームに来年も出場の夢をたくし、受験準備の合い間にコーチしてくれます。今がハンドボール部の伝統を育てる時機だと、全員力を合わせ練習に励んでいます。

（主将　中嶋　誠）



精神力を養成

清水西高（静岡）



わが母校のハンドボール部の歴史は長い。県下でも有名だったと聞いていますが、近年はあまり活躍していなかったようです。そしてレクリエーション的なハンドボール部でした。しかし今では、決まっていなかったコーチも決まり、あいまいな考えはいっさい捨て、他校のチームと劣らない試ができるように努力を重ねてきました。その結果、今まで大差で敗れていたチームにも、私たちの努力が実を結んでほんのちょっとの差に追い着くことができました。

しかも私たちの初めての試みとして、夏季合宿を開きました。昼はコーチのきびしい叱声がとび、夜は蚊の大群に襲われ、部屋は、トクホンと〝ムヒ〟の臭いでいっぱいでした。最後の日には実業団と合同練習し、よい勉強となりました。苦しい練習にも耐え、自分の体力の限界をも知ることができました。

合宿のおかげで、チーム内の融和をはかり精神力を養うことができたと思っています。チームワークで、そして部員のよい試合をやりたいという心、試合には勝ちたいという心が一致し、毎日練習に励んでいます。（二年生谷まさ子）

信頼

今治西高（愛媛）

もともと男子校であった我が校に戦後五年目、山崎幸夫先生によって女子ハンドボール部が設けられました。私たちは数多くの先輩を持ち、そして山崎先生の下で練習に励みました。毎日の練習に、ともすればくじけがちになる部員の心を励ましてくれたのは、先輩の努力の結晶である数々の賞状でした。しかし、これだけに励まされたのではありません。



それはチーム全体に、お互いにたいしての信頼と自分自身にたいしての信頼が、ハンドボールをすることによって得られると確信していたからです。

人間は常に社会機構の中にあります。自分の欲望のため、それからはずれることのないように、常に正常に回転しなければならない。それゆえ、チームワークと潤滑油となってくださる先生や先輩の尊さは忘れることはできません。私たちはやがて、未熟ながらもハンドボールによる汗、涙、誇りをもってこの機構の中に一歩を踏み入れ、そしてさらにもう一歩とハンドボール部の発展を期待しながら…。（主将　岡田美保子）

目標は一つ

美須々ケ丘高（長野）



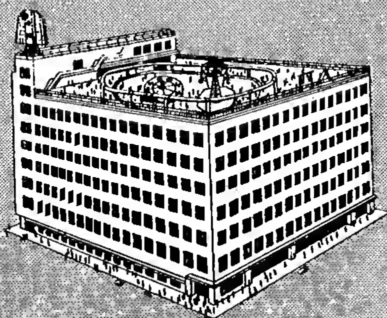
本校は松本市北東部にある県営運動場の隣り、美須々ケ丘にあります。校庭から北アルプス連峰、美ケ原高原が望まれるこの地に、昭和四十年春原先生の赴任と同時にチーム結成の動きがありました。六月同志会として発足、ことし協会に登録するとともにみなさんの仲間入りをしました。4月に一年生五人を迎えて活動も軌道に乗り、全国大会予選、国体予選と出場しましたが、やはり試合経験が少なく惜敗しました。現在長野県のチームは上田市周辺に集まっています。練習試合に行くにも三時間ぐらいかかり、時間的、経済的に余裕がありません。早く全県下チームが結成されることを望んでいます。

国体予選も終わり、来シーズンに備えて北ア連峰に日が落ち、ボールが見えなくなるまで、走り、投げ、ジャンプし、汗と泥にまみれて、ただ一つの目標「勝」に突進しています。少しでも気を抜くと、先生の大きな声が容赦なくとんできます。何回でもやり直し。こんなとき先生がいちばん憎いと思う。しかし、たまには冗談をいってなごやかなふんいきに包まれることもしばしば。この苦しい練習に耐え、互いに協力し、より良いチームにしたいと思います。（主将　赤羽薫）

あれから2年

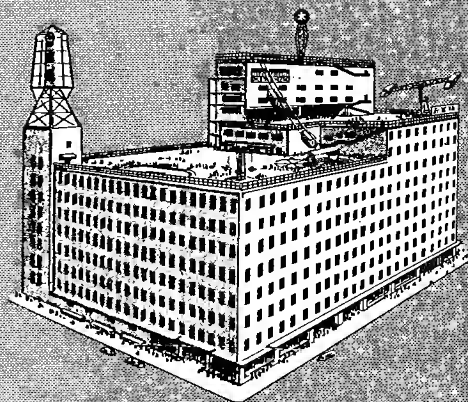
紋別北高（北海道）

紋別北高校ハンドボール部の歴史は浅い。最初先輩たちは、満足な部品がなに一つない「0」の状態から、手にマメを作り、額に汗を流して、グラウンド作り。ありあわせの木材で作ったゴールポストにゴムボールでスタートしたのだ。あれから2年の月日が流れた。その間、男子は



ご家庭に
幸せをはこぶ
バラの包装紙

おくりものに
大洋の商品券
熊本八代両店共通

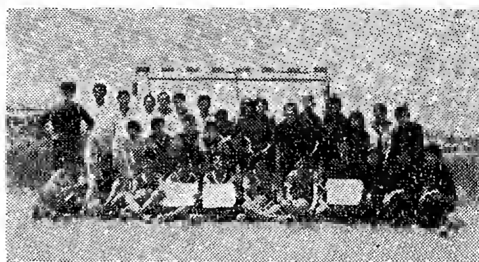




熊本市下通町1丁目3－10

大洋

TEL〈大代表〉2－1111



常に目標を全道制覇におき、女子は技術向上に努めた。だが最初はいろいろな障害があり、何度かくじけそうになった。しかしそのたびに仲間同士で励まし合い、助け合ってここまでやってきた。

今ふりかえってみると、私たち女子はあまりにも先生やチームメートにたよりすぎていたように思われる。創立して2年目の私たちは、もうチームとして一本立ちできるはず。これから新人戦までの2カ月余り、決意を新たにして、他校との試合で1点でも多く入れ、点差を縮めることができるように努力したい。また、自分自身の精神力と限界をためす意味においても、必死にボールに食いついていく。

（主将　田村貞子）

無限のファイト

室蘭工高（北海道）



僕たちのハンドボールクラブは、三年前に同好会として生徒会から認められた。一年目は用具の準備、練習する場所などでいろいろ苦労しながらも、市内の他校と練習試合をやっていましたが、成績はいつも無惨なものでした。ことしからクラブに昇格し、活動の方もどうやら軌道に乗り、対外試合にもどんどん参加しています。しかしながらあまり勝ち星には恵まれず、その理由としては、本校には専門のコーチがいないこと、中学時代からハンドボールになじみの少ない部員がほとんどです。いつも自分たちで練習方法、技術研究しながらやっていかなければならない。

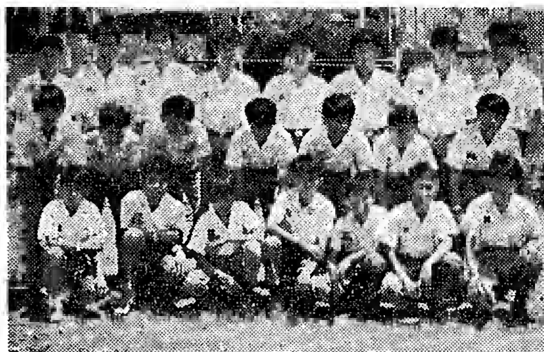
僕たちの部には伝統はない。でもこれから僕たちがそれを築き上げていくのだと思うと、無限のファイトが湧いてきます。ことしの夏休みには有名な昭和新山のふもとにある洞爺湖の湖畔で合宿をし、おかげでファイトがでてきました。僕たちの目標は全国大会の出場です。この夢を実現させようと、部員一同張り切っています。みなさんのご声援をお願いします。

（主将　三浦強樹）

部の歴史

マリスト学園（熊本）

マリスト学園ハンドボール部が誕生したのは、いまから三年前。全国的にレベルの高い熊本にあって、おそい誕生である。だが、その遅れを取り戻すべく選手は一体となって汗を流し、あすへの栄光を夢見てたくましく伸びている。思えば創立当時難はひとくちで言い尽くせぬものがあった。草取り、石拾いとグラウンドづくりから始まり、ボールを握るどころではなかった。そのうえ、進学高校というハンディとハンドボールを知らない生徒、学校。指導者にも恵まれず、部として形を整えたのは、それからしばらくしてからであった。しかし横山さんという良きコーチを迎えていらい、まるで水を得た魚のように活発となった。翌年には中学部も併設し、現在では40人を越す本校最大のクラブとなった。よりよい成果をあげることはむずかしいことであるが、僕たちは大いにがんばる。（主将　佐々木洋助）



連載第27回

ハンドボール球史

～全静岡城北高、女王の座に～

5年目を迎えた全日本総合選手権は、当時男女に有力チームを出していた山梨県（富士吉田市）で開かれた。参加チームは男子20と大会最高を数え、2年ぶりの女子も7チームが参加を申し込んだ。男子は地方が東西の有力チームに敢然と挑戦、地方での発展も普及を裏付けたが、この年は西ドイツの初来日が予定されたこともあり、トップチームは例年以上の充実をみせ上位に波乱はなかった。（注＝西ドイツは結局31年に来日）

前年セントポール（全立教大）に王座を奪われた全日体大の執念はすさまじいものがあり、準々決勝で全教大に、準決勝で早大に苦戦したが、どうにか勝ち進んだ。両試合とも非常にエキサイトし、反則退場者を出すほどであった。連勝をねらうセントポールAは2回戦で日体大現役に窮地に追い込まれながら辛くもかわしたが、準決勝で西日本の雄大阪クに敗れた。

大阪クは大会初出場だったが、26、27年の国体優勝メンバーを主力にした強者で、国体とのダブル・クラウンをねらっての登場であった。その野望は決勝で全日体大のためにくずされたが、2カ月後の国体（第8回・今治）では見事に優勝、3連勝を飾っている。このほかでは世田谷工高OBによるリミットク（東京）が緒戦で全明大Aを延長のすえに破ったのが注目された。

女子は固定化していた顔ぶれに大学・高校現役やOGがプラスされ、数こそ少ないが男子と同様に活気をみせた。前々回の勝者芙蓉ク（東京）が諸戦で初出場の日体大の若さに敗れる波乱があり、その日体大が2回戦（準決勝）で全静岡城北高に完敗してしまった。

全静岡城北高はこの対戦で26本のシュートのうちの大半を得点に結びつける攻撃力をみせ、余勢を駆って決勝でも、3年ぶり2回目の優勝をねらう全山梨をも押し切ってしまった。母体ともいうべき静岡城北高は全国高校選手権で26年4位、27年3位、27年3位と着々と全国の最上位の進出してきたもので、若手OGの張り切った試合ぶりは印象的であった。なお同校の前身は静岡高女で、昭和15年の第1回全日本女子に出場、1回戦で梅花高女（大阪）に敗れているが、それから13年後に全日本の女王の座にいたわけである。3位決定戦は現役学生同士の顔合わせとなった。

ところで記者の記憶に間違いがなければ、日体大女子が学生チームに負けたのはこれが最後のはずである。つまり、この試合以後今日まで連戦連勝を続けているわけだ。日体大女子の対学生チーム連勝記録は、昭和36年秋に復活した関東学生女子リーグの10シーズン連続35戦全勝と全日本学生2年連続7戦全勝を含め61連勝（10月1日現在）である。「打倒日体」が果たされなければ、女子学生界の前進はあり得ない現状といえよう。

▼第5回（昭和28年8月26日～28日・山梨県富士吉田市）

▽男子1回戦

日体大（東京）18—3 浅陽ク（長野）

リミット（東京）9—8 全明大A（東京）

菊里ク（愛知）不戦勝 茨城大（茨城）

全明大B（東京）7—5 セントポールB（東京）

▽同2回戦

セントポールA（東京）15—13 日体大

五陵ク（愛知）9—7 桐生ク（群馬）

全山梨（山梨）17—0 岐阜大（岐阜）

大阪ク（大阪）22—9 リミット

早大（東京）23—6 菊里ク

全慶大（東京）12—6 芝浦工大（東京）

全教大（東京）26—4 奈良ク（奈良）

全日体大（東京）16—8 全明大B

▽同準々決勝

セントポールA 9—3 五陵ク

大阪ク 20—0 全山梨

早大 4—3 全慶大

全日体大 9—8 全教大

▽同準決勝

大阪ク 9（3—2, 6—1）3 セントポールA

全日体大 11（5—6, 6—1）7 早大

▽3位決定戦

セントポールA 17（9—6, 8—5）11 早大

▽決勝

全日体大 9（4—5, 5—1）6 大阪ク

優勝メンバー

片山彰一　望月伸三郎　遠藤健次　菊池陽三　山本孝男　斎藤一　石田恒樹　金原至　浅野克彦　皆川茂夫　高山政悟

▽女子1回戦（3試合）

日女体短大（東京）不戦勝 瑞陵ク（愛知）

全静岡城北高（静岡）11—5 山梨高（山梨）

日体大（東京）5—4 芙蓉ク（東京）

▽同準決勝

全山梨（山梨）11（3—2, 8—3）5 日女体短大

全静岡城北高 15（10—0, 5—2）2 日体大

▽同3位決定戦

日女体短大 6（2—2, 4—3）5 日体大

▽同決勝

全静岡城北高 7（3―1、4―2）3 全山梨

優勝メンバー
杉山美代子 遠藤富子 清水二三子 石埜道子 高橋美津子 永田立子 太田澄子 勝間田千恵子 飯塚裕子 角野康子 渡辺とよ子

日体系、5回目の優勝

第6回大会からは、翌年の国体開催県で開くことを内規とした。この慣習が破られたのは33年の第10回大会のときだけで、この大会は翌年の国体開催地が東京都でありながら山口県（下関市）で開かれた。国体を控えた各県にとってはそのリハーサルにもなり、一般ファンにハンドボールを理解してもらうためにも、うまい方法であった。

大会は男女とも前回を上回る参加があり、好試合が続いた。男子は関東学生11校14チームが出場。この春東京6大学の関東学連脱退事件があったため、芝浦工大対明大A、日体大対明大B、全法大対中大、全日体大対セントポールB、全早大対日体大、全日体大対全慶大、それに決勝などは異常な闘志のぶつかり合いとなった。その結果、全日体大が攻守に一日の長をみせて2連勝、日体系として5回目の優勝を飾った。全関学、桜丘会（愛知）の初出場や芝浦工大が、初めてベスト8に進出したのも記憶されるべきだ。女子は全静岡城北高の2連勝に終わったが、OGを主力とした女子のクラブチームが、この大会での優勝が最後になるとは当時だれも予想しなかったことである。この翌年は水海道二高（茨城）翌々年は半田高（愛知）＝いずれも次号で詳報＝となり、その次からは実業団の全盛となるからである。全静岡城北高の勝ちっぷりは、前年にもまして見事なものであった。大谷ク（大阪）対全山梨が第2延長にもつれ込んだのをはじめ、2点差以内の試合が6試合あったのを見ても、10―3、9―2のスコアで優勝した全静岡城北高の実力は抜群といってもいい。

▼第6回（昭和29年11月21日〜23日・神奈川県平塚市）

▽男子1回戦（1試合）
世田工クB（東京） 11―6 明星ク（東京）

▽同2回戦
セントポールB（東京） 7―2 三高ク（東京）
芝浦工大（東京） 5―4 明大A（東京）
桐生ク（群馬） 6―2 三春台ク（神奈川）
全鎌倉（神奈川） 11―4 富岡ク（群馬）
五陵ク（愛知） 3―2 茨城大（茨城）
全法政二高（神奈川） 5―4 全東大（東京）
全慶大（東京） 18―2 全愛工ク（愛知）
全早大（東京） 17―4 仙台育英ク（宮城）
日体大（東京） 11―3 明大B（東京）
静岡大（静岡） 9―3 世田工クA（東京）
全関学（兵庫） 8―5 全教大（東京）
セントポールA（東京） 5―4 桜丘会（愛知）
全法大（東京） 5―1 中大（東京）
全静岡（静岡） 不戦勝 三浦高ク（神奈川）
愛知学芸大（愛知） 不戦勝 兵庫工ク（兵庫）
全日体大（東京） 17―0 世田工クB

▽同3回戦
全日体大 25―2 セントポールB
芝浦工大 9―0 桐生ク
全鎌倉 8―7 五陵ク
全慶大 17―2 全法政二高
全早大 12―5 日体大
全関学 15―1 静岡大
セントポールA 5―2 全法大
全静岡 6―5 愛知学芸大

▽同準々決勝
全日体大 15（6―2、9―4）6 芝浦工大
全慶大 8（2―3、6―3）6 全鎌倉
全早大 14（6―4、8―3）7 全関学
セントポールA 11（8―1、3―5）6 全静岡

▽同準決勝
全日体大 12（5―5、7―2）7 全慶大
全早大 9（8―3、1―5）8 セントポールA

▽同3位決定戦
セントポールA 9（6―2、3―5）7 全慶大

▽決勝
全日体大 9（6―2、3―4）6 全早大

優勝メンバー
光島磯雄 望月伸三郎 遠藤健次 狩野幸介 山本孝男 斎藤一 鈴木稔 金原至 浅野克彦 石田恒樹 皆川茂夫 小野秀雄 柳沢民弥 幸田末之

▽女子1回戦（4試合）
水海道二高（茨城） 5―0 平塚江南高（神奈川）
大谷ク（大阪） 4―3 太田二高（茨城）
熊谷女高（埼玉） 不戦勝 平塚ク（神奈川）
注＝両国ク（東京）福島ク（福島）棄権

▽同準々決勝
熊谷女高 4―3 日体大（東京）
水海道二高 4―3 二階堂ク（東京）
大谷ク 8―6 全山梨（山梨）
全静岡城北高（静岡） 不戦勝 （相手なし）

▽同準決勝
全静岡城北高 10（7―0、3―3）3 熊谷女高
水海道二高 3（2―0、1―1）1 大谷ク

▽同3位決定戦
熊谷女高 9（6―6、2―2、0―0、1―0）8 大谷ク

▽決勝
全静岡城北高 9（4―2、5―0）2 水海道二高

優勝メンバー
杉山美代子 遠藤富子 岡本光子 佐野益子 高橋美津子 永田立子 太田澄子 角野康子 藤波光代 勝間田千恵子 梅原きぬよ 清水二三子 岡尾節子 湯沢照代

〔編集部からお願い〕 全静岡城北高の優勝メンバーの方は、現在どこにお住いか、もし知っている方がおりましたら編集部までご連絡ください。

☆ ☆ ☆ ☆

東京都協会だより

11月28日から東京都選手権

第4回東京都ハンドボール選手権大会は11月28日（月）から12月1日（木）まで東京体育館で開かれる。大会要項は次のとおり。

◇期日　11月28日(月)—12月1日（木）まで

◇場所　東京体育館

◇種目　一般男子（教員、大学を含む）一般女子（大学を含む）高校男子、高校女子。オープンゲームとして中学男子、中学女子

◇資格　日本協会登録チーム（東京都以外のチームでも参加できる）

◇人員　1チーム監督1人、選手15人（監督が選手として出場する場合は選手の中に登録する）

◇申し込み　11月13日（日）までに申し込み用紙2通を添えて東京都協会に申し込む。（高校、中学は別に定める）。

◇参加料　1チーム1、500円申し込みと同時に納入すること

◇組み合わせ　11月14日（月）午後6時から常任理事会を開いて責任抽選し、各チームに通知する。

◇代表者会議　11月26日（土）午後6時から大崎電気工業株式会社で開く。

◇表彰　優勝杯、賞状を贈る。また一般男女の優秀選手を表彰する。

◇その他

（1）中学男女はオープン戦とし、記念品を贈る。

（2）高校男女はともに準決勝から開く。

（3）電話の申し込みは受け付けない。

（4）申し込み後のメンバー変更は認めない。申し込み用紙の番号と選手の背番号は同一であること。

（5）所定様式以外の用紙を使用したときは受け付けない。

（6）試合開始時間は会社の勤務時間、大学、高校の授業時間を考慮して午後1時からの予定。午後8時ごろまでに終わるようにする。

理事会議事録

◇とき　10月12日午後6時

◇ところ　大崎電気工業株式会社会議室

◇出席者　渡辺和美、古賀健一郎、松田利秋、安藤純光、中沢重夫、近藤金博、池田哲哉、安藤千春

一、松田常任理事から「8月下旬に東京都中学選手権大会を開き、非常に盛大だった。とくに三多摩地方の中学生は、ハンドボールのメッカ・駒沢でプレーできたことを非常に喜んでいた。来年の大会もぜひ駒沢で開いてほしいという要望が多かった。また東京都協会から大会補助金をいただき、厚くお礼申し上げます」と報告があった。

一、国体関東予選に出場した千代田印刷機、レナウン工業、桜友会、明星高、桜水商高の5チームに、国体選手強化費として1チームに15、000円の補助金を支出することを決めた。これは東京都体育協会からの補助金である。

一、第4回東京都ハンドボール選手権大会は11月28日から12月1日まで東京体育館で開くが、この大会要項を決めた。（別表のとおり）

☆　☆

実業団だより

関東実業団連盟結成へ

全日本実業団ハンドボール連盟はチームの増加をはかるとともに、各ブロック連盟の結成に力を注ぎ、すでに近畿、東海の両ブロックで連盟が結成されている。そこで大崎電気工業の渡辺和美社長（全日本実業団連盟理事長）は関東連盟の結成に乗り出し、関東一都七県（山梨県含む）の各県理事長、各実業団チームにたいして協力かたを要請、11月5日（土）午後2時から大崎電気工業で「関東実業団ハンドボール連盟結成準備委員会」を開くことになった。

神奈川県実連結成

神奈川県実業団ハンドボール連盟は9月上旬結成され、事務所を日本発条株式会社（横浜市磯子区新磯子町一）に置いた。事務連絡者は日本発条の芦川勝英氏。電話は（横浜）045—75—1261

▽会　長　平出　一（日進商会副社長）

▽副会長　佐々間　亮（パイロット体育部長）長井善三郎（和銅建設社長）土居盛恵（日本発条取締役人事部長）山上（日本鋼管）

▽理事長　泉　正明（日本発条営業部）

地方だより

◇国体東海予選兼東海選手権（9月10—11日、岡崎北高）

▼高校男子1回戦

桜台（愛知）17—9 気賀（静岡）

加納（岐阜）12—9 四日市工（三重）

▽決勝

桜台 13（6—1 7—7）8 加納

桜台は3年連続10回目の出場

▼同女子1回戦

加納（岐阜）8—1 稲沢（愛知）

静岡城北（静岡）17—11 松阪女（三重）

▽決勝

静岡城北 5（2—1 3—1）2 加納

静岡城北は4年連続6回目の出場

▼一般男子リーグ

常盤工業（岐阜）20—15 桜丘会（愛知）

本田技研（三重）11—11 清商ク（静岡）（引き分け）

桜丘会 20—14 清商ク

本田技研 15—15 常盤工業（引き分け）

本田技研 20—12 桜丘会

清商ク 13—6 常盤工業

【順位】①本田技研②清商ク③常盤工業＝以上国体代表④桜丘会

▼同女子リーグ

田村紡（三重）28—0 城北ク（静岡）

愛知紡（愛知）23—4 加納高ク（岐阜）

田村紡 21—3 愛知紡

加納高ク 5—3 城北ク

田村紡 15—4 加納高ク

愛知紡 18—5 城北ク

【順位】①田村紡②愛知紡＝以上国体代表③加納高ク④城北ク

▼教員1回戦

岐阜 19—9 静岡

愛知 21—7 三重

▽同決勝

岐阜 14（7—8 7—3）11 愛知

岐阜は3年連続3回目の出場

◇北信越予選（9月10—11日、氷見高）

▼高校男子1回戦

上田（長野）19—4 藤島（福井）

▽同準決勝

上田 10—7 柏崎（新潟）

高岡商（富山）16—12 金沢商（石川）

▽同決勝

上田 15—6 高岡商

▼同女子1回戦

羽咋（石川）7—6 高志（福井）

▽同準決勝

羽咋 9—6 巻（新潟）

有磯（富山）11—7 小諸商（長野）

▽同決勝

有磯 11—2 羽咋

▼教員1回戦

富山 35—8 金沢教員ク（石川）

▽同準決勝

富山 20—13 福井

長野 25—18 新潟

▽同決勝

長野 13—9 富山

▼一般女子準決勝（参加3チーム）

高岡女OG（富山）12—8 小松市女OG（石川）

▽同決勝

高岡OG女 13—2 全新潟（新潟）

以上4種目はいずれも優勝チームが国体に出場。

▼一般男子1回戦

北農ク（長野）22—12 柏崎ク（新潟）

▽同準決勝

氷見ク（富山）30—10 北農ク

県工ク（石川）25—9 北陸電力（福井）

▽同3位決定戦

北農ク 22—8 北陸電力

▽同決勝

氷見ク 27—7 県工ク

3位までが国体に出場

三菱重工、首位奪い返す

◇愛知県実業団夏季リーグ戦（9月・名古屋金山体育館）

▼1部

東海製鉄 27—20 大同製鋼

東海製鉄 33—20 中部電力

大同製鋼 30—18 日本碍子

三菱重工 18—16 中部電力

東海製鉄 30—11 日本碍子

大同製鋼 32—16 中部電力

日本碍子 15—14 三菱重工

中部電力 17—16 日本碍子

三菱重工 20—19 大同製鋼

三菱重工 20—19 東海製鉄

得	【三菱】		【東海】	後
0	早川	GK	横江	0
1	平子	FP	鏡味	5
6	尾之内		川瀬	1
8	深谷		鷲野	1
0	塚本		太郎良	3
1	神谷		国枝	7
0	大場		加藤	1
1	荒木		日光	0
0	早川		饗江	1
3	北野		能手	0
20	(0)	7MT	(3)	19

【順位】①三菱重工3勝1敗＝2シーズンぶり6回目の優勝②東海製鉄3勝1敗③大同製鋼2勝2敗④中部電力1勝3敗⑤日本碍子1勝3敗（注・同成績の場合は当該対戦の勝者が上位）

▼2部

東洋レーヨン愛知 25—11 ブラザー工業

タヨシ産業 20—17 昭和染工

ブラザー工業 17—8 昭和染工

東レ愛知 30—19 昭和染工

タヨシ産業 31—14 ブラザー工業

東レ愛知 15—14 タヨシ産業

【順位】①東洋レーヨン愛知3戦全勝＝初優勝②タヨン産業2勝1敗③ブラザー工業④昭和染工
▽1・2部入れ替之戦
東レ愛知（2部） 27—21 日本碍子（1部）
東レ愛知は初昇格

桜丘会優勝

◇愛知県クラブチーム選手権大会（8月1、2、3、11、12日・金山体育館）
「A組リーグ」
名大ク 26—20 瑞陵ク
一宮ク 17—15 松蔭ク
名大ク 26—19 松蔭ク
一宮ク 26—19 瑞陵ク
一宮ク 17—15 名大ク
瑞陵ク 27—17 松蔭ク
【順位】①一宮ク②名大ク③瑞陵ク④松蔭ク
「B組リーグ」
桜丘会 31—16 愛商ク
愛工ク 35—9 名古屋無線
桜丘会 45—11 名古屋無線
愛工ク 22—15 愛商ク
愛商ク 27—20 名古屋無線
桜丘会 22—17 愛工ク
【順位】①桜丘会②愛工ク③愛商ク④名古屋無線
▽三位決定戦
愛工ク 31（17—4 14—7）11 名大ク
△決勝
桜丘会 26（17—7 9—5）12 一宮ク

四日市工、松阪女優勝

◇三重県高校総合体育大会（8月27、28日・上野市崇広中学）
▼男子A組リーグ
四日市商 10—10 津（引き分け）
亀山 21—3 海星
四日市商 18—8 亀山
津 11—4 海星
四日市商 17—4 海星
津 7—6 亀山
【順位】①四日市商②津③亀山④海星
▼男子B組リーグ
四日市工 16—6 津工
津工 15—8 高田
四日市工 14—4 高田
【順位】①四日市工②津工③高田
▽1位決定戦
四日市工 17—6 四日市商
▽2—3位決定戦
津工 14—6 四日市商
▽4位決定戦
津工 16—7 津
▽5位決定戦
亀山 15—7 高田
▽6—7位決定戦
高田 16—8 海星
▼女子A組リーグ
津女子 20—0 亀山
暁 14—1 津
上野商 28—1 メリノール
津女子 7—3 上野商
亀山 9—2 津
暁 13—3 メリノール
津女子 12—1 暁
上野商 8—7 津
亀山 16—3 メリノール
津女子 6—1 暁
上野商 9—4 亀山
メリノール 6—2 津
暁 8—7 亀山
上野商 11—0 津
津女子 14—3 メリノール
【順位】①津女子②上野商③暁④亀山⑤メリノール⑥津⑦亀山
▼女子B組リーグ
松阪女 11—4 白山
菰野 5—5 上野（引き分け）
四日市 6—6 四日市商（引き分け）
松阪女 13—0 菰野
白山 9—8 四日市
四日市商 14—2 上野
松阪女 14—1 上野
白山 14—9 四日市商
四日市 20—1 菰野
松阪女 12—3 四日市商
白山 12—4 菰野
四日市 8—2 上野
松阪女 10—0 四日市
白山 13—2 上野
四日市商 9—3 菰野
【順位】①松阪女②白山③四日市商④四日市⑤菰野、上野
▽7—8位決定戦
四日市 8—6 亀山
▽5—6位決定戦
四日市商 6—5 暁
▽3—4位決定戦
上野商 7—6 白山
▽1—2位決定戦
松阪女 5—3 津女子

× × × ×

関東学生リーグ開幕

関東学生秋季リーグ戦は10月19日駒沢第一球技場で開幕。今シーズンから女子は国士館大、東京学芸大が新加盟して5チームとなった。
◇10月17日
▽一部
立大 21（9—6 12—6）12 早大
芝浦工大 26（14—9 12—6）15 慶大
日体大 17（9—8 8—6）14 明大
教大 25（13—7 12—6）13 中大
▽二部
日大 21—3 茨城大
法大 35—15 防衛大
東大 12—11 武蔵工大
▽女子
日女体大 7—6 東女体大
日体大 26—0 国士館大

編集後記

○…茨城県協会の磯部浩副理事長から手紙が届いた。これによると「全日本教職員選手権大会の記事取り扱いが小さすぎる。差別しているのではないか。日本協会主催だから、どの大会も同じ扱いにすべきだ」というもの。まさにそのとおりである。しかしすべてがそのようにいくとは限らない。そこに編集子の悩みがある。教職員大会は8月中旬。9月号には当然間に合わない。10月号になる。ところが原稿締め切りは前々月の15日、つまり8月15日である。原稿そのものが来ない。そうすると遅れる。
○…10月号に掲載されている記録は、杉山茂君（NHK名古屋）がまとめてくれたもの。いまそんな状態です。総評も確かに受け取った。それは11月号に回した。なにしろ協会以外の人で原稿を書くのは、わずか二人。この二人のスタッフですべてをやりくりするのだから、大変なことです。全国の協会役員にお願いしたいことは、どんな記録でも原稿用紙に書いてほしいことです。記事のスタイルは、本誌を見ればわかります。そうすれば編集子の手間も省けます。割り付けが済んだあとに原稿がくると、どうしても扱いが小さくなることを知ってほしい（ふぐ）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第三十八号
昭和四十年六月[illegible]日
第三種郵便物認可
昭和四十一年十月二十五日印刷
昭和四十一年十一月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 高嶋冽
定価 百五十円